
土地分類基本調査

二本松

5万分の1

国土調査

福島県

1983

序 文

国土は、再生産の不可能な国民のための限られた資源であります。

この貴重な国土について、自然環境を保全しつつ、高度な利用を進めるためには、土地に関する自然的特性等現況についての総合的な資料の収集整備が必要であります。

本調査は、この趣旨をもって国土調査法に基づき、地形・表層地質・土壌・土地利用現況等土地の基本的条件を総合的かつ科学的にその実態を調査し、地域の特性に応じた土地利用計画・環境保全計画等国土の有効な利用を図るための基本資料とするものであります。

本年度は、5万分の1地形図「二本松」図幅の区域を調査し、ここに発行することになりました。本県では、昭和46年度「猪苗代湖」47年度「若松」50年度「喜多方」51年度「磐梯山」52年度「田島」53年度「宮下」54年度「針生」55年度「糸沢」56年度「福島」図幅の調査を完了しております。

なお、この調査にあたり積極的に御協力をいただいた福島大学鈴木敬治先生、中村嘉男先生はじめ諸先生方、調査地域の市町村、県農業試験場、県林業試験場及び関係機関各位に対し深く感謝の意を表する次第であります。

昭和58年3月

福島県農地林務部長

城 野 忠 雄

調査担当者一覧表

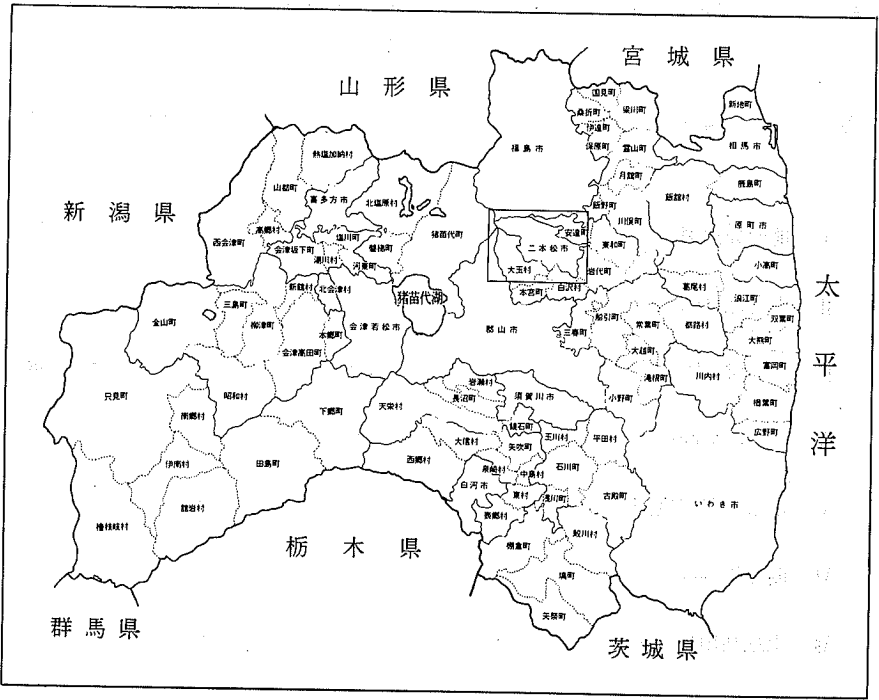
<p>地形分類調査</p>	<p style="text-align: center;">福島大学教育学部教授</p> <p style="text-align: center;">福島県会津若松市立謹教小学校教諭</p> <p style="text-align: center;">福島県富岡町立富岡第一小学校</p>	<p>中 村 嘉 男</p> <p>田 崎 敬 修</p> <p>高 橋 正 之</p>
<p>表層地質調査</p>	<p style="text-align: center;">福島大学教育学部教授</p> <p style="text-align: center;">助教</p> <p style="text-align: center;">〃</p> <p style="text-align: center;">福島県立福島北高等学校教諭</p> <p style="text-align: center;">岩代町立小浜中学校</p>	<p>鈴木 敬 治</p> <p>真 鍋 健 一</p> <p>中 馬 教 允</p> <p>吉 田 義</p> <p>伊 藤 七 郎</p>
<p>土 壤 調 査</p>	<p style="text-align: center;">福島県農業試験場農芸化学部長</p> <p style="text-align: center;">主任研究員</p> <p style="text-align: center;">研究員</p> <p style="text-align: center;">福島県林業試験場育林部長</p> <p style="text-align: center;">主任研究員</p> <p style="text-align: center;">研究員</p>	<p>鈴木 平 喜</p> <p>菅 野 義 忠</p> <p>佐 藤 紀 男</p> <p>平 川 昇</p> <p>荒 井 賛</p> <p>渡 辺 次 郎</p>
<p>関 連 調 査</p>	<p style="text-align: center;">福島大学教育学部教授</p> <p style="text-align: center;">福島県農地林務部農地計画課主査</p>	<p>中 村 嘉 男</p> <p>猪 狩 孝 一</p>

目 次

総 論	1
各 論	19
I 地形分類図	19
II 表層地質図	25
III 土 壌 図	38
IV 傾斜区分図	48
V 水系・谷密度図	51
VI 開発規制図	54
VII 土地利用現況図	55

大 臣

位 置 図



總

論

1 位置及び行政区画

1. 位置

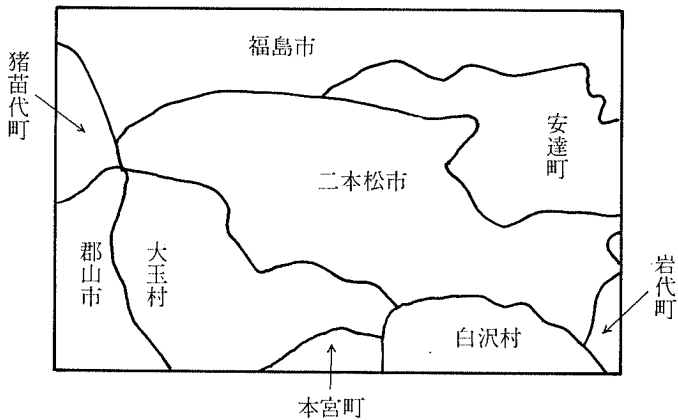
「二本松」図葉は、県のほぼ北部中央域に位置し、経緯度は東経 $140^{\circ}15'$ ～ $140^{\circ}30'$ 、北緯 $37^{\circ}30'$ ～ $37^{\circ}40'$ の範囲内にあり、図葉内面積は408 km²である。

2. 行政区画

図幅内の行政区画は第1図のとおりで、福島市、二本松市、郡山市、安達郡安達町、大玉村、本宮町、白沢村、岩代町、耶麻郡猪苗代町の3市4町2村からなっている。

また、本図幅内に占めるこれらの市町村の面積及び占有率は、第1表のとおりである。

第1図 行政区画図



第1表 図幅内市町村面積

区分 市町村名	図 幅 内 面 積		市町村全面積 B (km ²)	A/B×100(%)
	実数A (km ²)	構成 (%)		
福 島 市	47.75	11.7	745.86	6.4
二 本 松 市	121.72	29.8	130.56	93.2
郡 山 市	53.16	13.0	729.42	7.3
(安達郡)				
安 達 町	35.30	8.7	43.75	80.7
大 玉 村	79.34	19.5	79.34	100.0
本 宮 町	18.01	4.4	39.54	45.5
白 沢 村	27.03	6.6	48.56	55.7
岩 代 町	5.44	1.3	98.42	5.5
(耶麻郡)				
猪 苗 代 町	20.25	5.0	345.33	5.9
計	408.00	100.0	2260.78	18.0

2 人口

当図幅関係市町村の昭和55年10月1日現在の人口及び世帯数は第2表のとおりで、人口は661,348人、世帯数は189,290世帯である。

これを前回国勢調査時の昭和50年に対比すると、人口で39,105人、世帯数で22,804世帯の増加となっている。

なお、安達郡白沢村・岩代町はいずれも減少しているが、他の市町村ではいずれも増加している。

当該地域内の昭和55年の産業別就業者数は第3表のとおりであり、構成割合では、第1次産業は16.93%、第2次産業は28.00%、第3次産業は55.02%、分類不能産業は0.05%となっている。

昭和50年と昭和55年を比較すると、第2次・第3次産業就業者数は構成比でそれぞれ0.98%、3.65%増加しているが、第1次・分類不能産業就業者数はそれぞれ4.39%、0.24%減少している。

第2表 世帯数及び現住人口

市町村名	昭和50年(10月1日)			昭和55年(10月1日)			世帯数 増減	人口 増減
	世帯数	人		世帯数	人			
		計	男		女	計		
福島市	68,348	119,558	126,973	77,847	127,872	134,957	9,499	16,316
二本松市	7,960	16,088	17,425	8,498	16,265	17,374	538	126
郡山市	73,066	130,700	133,910	85,012	142,050	144,447	11,946	21,887
(安達郡) 安達町	2,378	11,391	5,783	2,589	5,831	6,102	211	542
大玉村	1,495	7,649	3,932	1,534	3,819	4,018	39	188
本宮町	4,416	18,186	8,675	4,934	9,199	9,969	518	982
白沢村	1,705	8,693	4,355	1,683	4,226	4,335	22	132
岩代町	2,392	11,562	5,962	2,380	5,446	5,702	12	414
(耶麻郡) 猪苗代町	4,726	20,108	10,400	4,813	9,525	10,193	87	390
計	166,486	622,243	318,251	189,290	324,233	337,115	22,804	39,105

(資料：国勢調査)

第3表 産業別就業者数 (15歳以上)

市町村名	昭和50年				昭和55年				増減数				増減率					
	計	第一次産業	第二次産業	分類不能産業	計	第一次産業	第二次産業	分類不能産業	計	第一次産業	第二次産業	分類不能産業	計	第一次産業	第二次産業	分類不能産業		
																	人	人
福島市	118,919	18,402	30,833	69,468	226	125,901	15,909	33,269	76,663	60	6,982	2,493	2,496	7,205	7,990	10,37	73.45	
二本松市	17,122	4,896	5,163	7,024	39	17,438	4,203	5,737	7,494	4	316	△	683	470	11.12	6.69	89.74	
郡山市	128,374	24,825	35,360	67,670	519	138,888	20,881	38,365	79,552	90	10,514	3,944	3,065	11,882	8.50	17.56	82.66	
(安達郡) 安達町	5,770	2,445	1,947	1,341	37	6,214	2,062	2,407	1,743	2	444	△	383	402	23.63	29.98	94.59	
大玉村	4,260	2,271	1,052	931	6	4,404	1,914	1,379	1,111	0	144	△	357	180	31.08	19.33	100.00	
本宮町	9,286	1,802	3,410	4,052	22	9,868	1,353	3,851	4,651	3	572	△	449	599	12.93	14.78	86.36	
白沢村	4,850	2,856	1,187	800	7	4,797	2,335	1,515	946	1	53	521	328	146	27.63	18.25	85.71	
岩代町	6,183	3,873	1,170	1,126	14	6,180	3,274	1,555	1,345	6	3	△	589	219	32.91	19.45	57.14	
(耶麻郡) 猪苗代町	10,388	3,696	2,336	4,334	22	10,439	2,954	2,673	4,808	4	51	△	742	474	14.43	10.94	81.82	
計	395,152	65,066	82,458	156,736	892	324,119	54,885	90,751	178,313	170	18,967	10,181	8,293	21,577	10.06	13.77	80.94	
							(16.99%)	(28.09%)	(55.02%)	(10.05%)								

(資料：国勢調査)

3 地域の特性

【地形的環境】

福島県中通り地方を覆う5万分の1地形図においては、ほぼ例外なく奥羽山脈、阿武隈河谷、阿武隈山地の3つの地形単元がセットとして含まれることになるが、それでも図幅ごとにそれら3地形単元の面積比が異なることでそれぞれの地形的特色が浮かび上がって来る。「二本松」をはさむ「福島」、「郡山」の場合は、ともに奥羽山脈（前者では吾妻火山群）・阿武隈山地は東西両隅に押しやられ、福島盆地、郡山盆地の盆地床が図幅中央に広びろと展開している。これに反して、「二本松」においては、安達太良火山群が吾妻火山群よりも約5km東へ、阿武隈山地（西縁丘陵）も「郡山」におけるよりも6kmほど西へそれぞれはり出しているため、全域がほぼ山地・火山地・丘陵地で占められることになり、広い平坦地はわずかに本宮盆地のみとなっている。しかし、丘陵地の特性として、開析谷底の平坦面が極めて高い密度で発達している。

（福島大学教育学部教授 中村嘉男）

【気候的環境】

気候的環境は、気候現象をとらえる際の単位地域のとり方によってさまざまなレベルがある。5万分の1地形図幅の次元での理解としては、いわゆる中気候レベルでの気候的環境（前述の地形的環境における3つの地形単元にほぼ対応する）と、もう一段細かな小気候レベルのもの（数km四方程度以内）とを考えなければならない。

気候区分上は、準裏日本型気候区（冬季、西高東低の気圧配置時にしばしば降雪があるところ）に入るが、それでも安達太良山の風かげにあたる本図葉域中・北部では積雪も比較的少ない。中通り低地帯の中でも福島・郡山地区と異なり、明瞭な盆地気候は認め難く、あえて指摘するならば、丘陵地の開析谷の方向に関わる斜面の向きに応じて日照・風向・気温等に微妙な小気候的地域差をみせる「丘陵地気候」が卓越しているものと思われる。

なお参考までに岳の気候表を掲げる。

（福島大学教育学部教授 中村嘉男）

第4表 気候表 岳 (二本松市永田門平)

項目	月												統計期間		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		年	
気	平均	1.1	0.7	2.3	9.5	14.6	17.8	21.8	23.1	18.6	12.4	7.5	2.0	10.7	1961~1970
	最高平均	2.6	3.1	6.6	14.7	19.9	22.2	25.6	27.1	22.3	16.4	11.8	5.7	14.8	〃
	最低平均	4.8	4.5	1.9	4.3	9.4	13.4	18.0	19.1	14.9	8.4	3.2	1.7	6.5	〃
	最高極	13.7	15.4	19.6	25.8	30.7	29.4	32.8	33.0	31.7	25.0	20.1	16.3	33.7	〃
温 ℃	起年日	昭44.27	昭37.11	昭44.27	昭38.17	昭44.10	昭38.28 昭38.30 昭38.28	昭36.26 昭38.28 昭38.30 昭45.24	昭8.2 昭8.3	昭36.6	昭45.9	昭44.2	昭43.2	昭8.8.2 昭8.8.3	〃
	最低極	12.0	11.4	10.2	5.2	0.0	5.4	8.2	12.3	5.0	0.4	5.4	11.7	12.0	〃
日 数	起年日	昭38.25	昭42.15	昭45.5	昭45.2	昭38.3	昭45.3	昭42.1	昭41.2	昭45.27	昭45.21	昭42.31	昭38.12	〃	
	最高 $\geq 25^\circ$ 最低 $< 0^\circ$	0	0	0	1	3	7	19	25	7	0	0	0	62	〃
降 水 量 mm	合計	73	56	75	88	129	162	182	153	152	129	76	84	1,359	1960~1970
	日量最大	31	36	49	71	71	119	112	75	112	60	61	58	119	1961~1970
日 数	起年日	昭44.31 昭45.30	昭41.27	昭38.24	昭42.19	昭40.7	昭41.28	昭43.11	昭39.24	昭41.24	昭38.29	昭40.8	昭36.17	昭41.6.28	〃
	≥ 1	15	10	10	10	10	14	15	13	13	11	10	11	142	〃
	≥ 10	2	2	2	3	4	6	6	5	5	4	3	3	45	〃
平均風速 m/s	2.0	2.1	2.4	2.7	2.3	2.0	1.9	1.9	1.6	1.9	1.8	2.1	2.0	2.1	〃
雪 cm	最深積雪平均	25	24	16	3	—	—	—	—	—	—	1	6	34	1959~1970
	最深積雪極	48	56	42	15	—	—	—	—	—	—	8	54	56	1961~1970
起年日	昭44.8	昭39.14	昭44.5	昭44.17	—	—	—	—	—	—	—	昭45.30	昭39.2.1	〃	
雪日数	27	24	15	3	—	—	—	—	—	—	—	3	16	8.0	〃
日照時数	166	191	224	221	243	208	189	201	152	161	157	149	2,262	〃	

日本気象協会福島支部 (1974) : 「福島県の気候」による。

【表層地質】

本図葉は、グリーンタフ地域と阿武隈山地との境界の部分にあたり、西半部と東半部の地域で地質構成上大きなちがいを示している。西部の山地域には中新世の固結堆積物（土湯峠層・深沢層）や凝灰岩を主とする火山性堆積物（木地小屋層）などからなるグリーンタフ地域の中新世の地層が、広くかつかなり厚層に発達分布している。一部東側の地域には、中新世末或は鮮新世の固結堆積物（原瀬層）や火山性堆積物（苗松山流紋岩・岩根流紋岩）の発達もみられる。これらを不整合におおって、笹森山周辺の更新世前期の火山性堆積物（伏拝火山砕屑流堆積物・笹森山安山岩）および安達太良火山群起源の火山性堆積物（火山砕屑物や溶岩）が発達している。これに対して、東部の丘陵性の山地域には、結晶片岩類を主とする変成岩とこれを貫く花崗岩質岩石が広範囲に分布し、中新世の凝灰岩や泥岩からなる固結堆積物や鮮新世の固結堆積物は北東部の小範囲の地域を占めて分布するのみである。

西部と東部の地域の境界部には、第四紀の各種の堆積物でおおわれているために地表ではあまり明確ではないが、北から岳温泉付近をとおるN—S方向の断層、原瀬付近をNW—SE方向にはしるアバット、本宮西をN—S方向にとおる断層などの伏在あるいは存在が推測される。

東部の丘陵性の山地域では、第四紀の半固結堆積物や未固結堆積物が、阿武隈川やその支流の谷ぞいなどに、段丘状の配置をとって分布する。一方、西部の地域では第四紀の未固結堆積物や火山性堆積物が、西から東に傾きながら、山麓斜面や谷を埋める形で分布しているところが多い。もちろん、開析の進んだ谷のなかでは、各時期の堆積物が段丘状の配置をとるところも多くみいだされる。

（福島大学教育学部教授 鈴木敬治）

4 主要産業の概要

(1) 農業

当図葉内の市町村の専業・兼業別農家数及び世帯員数（1975年及び1980年農業センサス対比）は、第5表のとおりである。

総農家数は9市町村ともわずかではあるが減少している。世帯員数も総農家数同様

減少している。

市町村別についてみると、専業農家数では、福島市・郡山市・安達郡本宮町・白沢村・岩代町・耶麻郡猪苗代町はわずかつ増加しているが、二本松市・安達郡安達町・大玉村は減少している。第1種兼業農家数では、いずれの市町村も減少している。第2種兼業農家数では、安達郡本宮町のみ減少しているが、他の市町村はいづれも増加している。

経営耕地面積は第6表のとおりである。1戸当りの当区幅地域平均耕地面積は114 aで、県平均116 aより若干低くなっている。

第5表 專業兼業別農家数

市町村名	昭 和 50 年				昭 和 55 年						
	總農家数	專業農家数	世帯員数		總農家数	兼業農家数	第1種兼業農家数		第2種兼業農家数		
			計	男			女	計		男	女
福島市	11,122	1,513	56,247	27,350	28,897	1,550	3,241	5,908	52,681	25,660	27,021
二本松市	2,580	361	14,203	7,001	7,202	275	1,019	1,241	13,526	6,672	6,854
郡山市	13,032	1,306	70,790	34,421	36,369	1,343	4,442	6,681	65,980	32,190	33,790
(安達郡) 安達町	1,366	153	7,523	3,704	3,819	110	505	692	7,015	3,468	3,547
大玉村	1,156	100	6,464	3,167	3,297	94	330	729	6,463	3,177	3,286
本宮町	1,257	60	6,584	3,186	3,398	65	324	810	6,256	3,026	3,230
白沢村	1,395	105	7,627	3,781	3,846	110	453	784	7,308	3,612	3,696
岩代町	1,746	201	9,372	4,604	4,768	241	777	686	8,916	4,420	4,496
(耶麻郡) 猪苗代町	2,042	225	10,869	5,272	5,597	236	705	1,028	10,297	5,004	5,293
計	35,696	4,024	189,679	92,486	97,193	4,024	11,796	18,559	178,442	87,229	91,213

(資料：農業センサス)

第6表 經營耕地面積

市町村名	經營耕地面積(昭和55年)					1戸当面積	田率	畑率	樹園地率	牧草地率
	計	田	畑	樹園地	牧草地					
福島市	9,713 ^{ha}	3,913 ^{ha}	1,721 ^{ha}	3,786 ^{ha}	293 ^{ha}	91 ^a	40.3%	17.7%	39.0%	3.0%
二本松市	3,189	1,668	617	653	251	126	52.3	19.3	20.5	7.9
郡山	14,868	10,856	2,604	1,198	210	119	73.0	17.5	8.1	1.4
(安達郡) 達安	1,492	726	192	554	20	114	48.7	12.9	37.1	1.3
大玉村	1,711	1,315	289	53	54	148	76.9	16.9	3.1	3.1
本宮町	1,396	1,166	170	41	19	116	83.5	12.2	2.9	1.4
白沢村	1,670	792	190	642	46	124	47.4	11.4	38.4	2.8
岩代町	2,014	679	340	822	173	118	33.7	16.9	40.8	8.6
(耶麻郡) 猪代町	3,251	2,796	428	8	19	165	86.0	13.2	0.2	0.6
計	39,304	23,911	6,551	7,757	1,085	114	60.8	16.7	19.7	2.8

(資料：農業センサス)

(2) 商業

昭和54年商業統計（第7表）によると、当図幅全域で商店数15,450店、従業者数67,272人、年間販売額約1兆7,615億円となっている。商店数を業種別にみると、卸売業が2,340店（15.2%）、小売業が9,135店（59.1%）、飲食店が3,975店（25.7%）となっている。市町村別にみると、福島市及び郡山市の二市で地域全体の商店数の85.1%、従業者数の89.3%になっており、地域全体の大部分を占めている。

(3) 工業

昭和54年の事業所数、従業者数及び製造品出荷額等は第7表のとおりである。

当図幅全域の事業数は2,713、従業者数は58,033人、製造品出荷額は約6,593億円である。

市町村別にみると、事業数では郡山市が1,233(45.4%)と最も多く、次いで福島市が894(33.0%)、二本松市が185(6.8%)、本宮町139(5.1%)の順になっており、大玉村が20(0.7%)で最も少ない。

従業者数では郡山市が23,265人(40.1%)と最も多く、次いで福島市が22,145人(38.2%)、二本松市4,454人(7.7%)、本宮町が3,885人(6.7%)の順になっており、白沢村が332人(0.6%)と最も少ない。

製造品出荷額では福島市が2,660億600万円(40.3%)と最も多く、次いで郡山市が2,639億9,200万円(40.0%)、本宮町が500億7,600万円(7.6%)、二本松市が494億1,900万円(7.5%)の順になっており、白沢村が16億円(0.2%)で最も少ない。

第7表 工業・商業統計

区 分 市町村名	工 業 (昭和54年)			商 業 (昭和54年)					
	事業所数	従業者数 人	製 造 品 出 荷 額 等 百万円	総 数	卸 売 業	小 売 業	飲 食 店	従業者数 人	年間販売額 万円
福 島 市	894	22,145	266,006	5,887	896	3,461	1,530	27,031	83,884,941
二 本 松 市	185	4,454	49,419	755	67	554	134	2,551	3,128,772
郡 山 市	1,233	23,265	263,992	7,267	1,271	3,930	2,066	33,021	84,362,474
(安達郡) 安 達 町	78	1,351	12,893	154	11	129	14	436	367,526
大 玉 村	20	584	3,647	94	5	75	14	210	170,108
本 宮 町	139	3,885	50,076	507	59	368	80	1,821	2,443,817
白 沢 村	26	332	1,600	91	10	78	3	218	121,767
岩 代 町	33	928	5,974	174	4	162	8	415	256,350
(耶麻郡) 猪 苗 代 町	105	1,089	5,703	521	17	378	126	1,569	1,416,679
計	2,713	58,033	659,310	(100.0%) 15,450	(15.2%) 2,340	(59.1%) 9,135	(25.7%) 3,975	67,272	176,152,434

(資料：昭和54年商業統計・昭和54年工業統計)

5 開発の現況と方向

(1) 道路・交通

当図葉内の主要道路としては、図葉内東部を南北に走る国道4号線があり、東京都と青森県を結んでいる。また、東北自動車道が並行して走り、当図葉内には、二本松のインターチェンジがあり、関東圏と結ぶ重要な役割を果たしている。図葉内の北中央部から北西には、国道115号線があり、相馬市から土湯峠を経て猪苗代町に通じている。

主要地方道は、本宮・熱海線、二本松・浪江線、中の沢・熱海線（磐梯熱海から沼尻まで有料道路「母成グリーンラインとなっている。）、本宮・三春線、本宮・土湯温泉線、川俣・安達線があり、一般地方道は、二本松・三春線、二本松・川俣線、本宮・岩代線、本宮・常葉線、松川・飯野線、松川・土湯温泉線、二本松・安達線、金谷・本宮線、山木屋・二本松線、石筵・本宮線、渋川・霊山線、本宮停車場線、二本松停車場線、安達停車場線、松川停車場・戸ノ内線、岳温泉線、大橋・五百川停車場線、安達太良山線、須賀川・二本松線、二本松・本宮線、馬場平・杉田線、須賀川・二本松自転車道線がある。

国鉄としては、東北本線が図葉東部の国道4号線に沿って走っており、上野から青森を結ぶ東北縦貫の国鉄幹線となっている。

また、東北本線に沿って東北新幹線が昭和57年6月に開通し、関東圏へ従来より短時間で往復できるようになった。

(2) 水資源

当図葉内には、阿武隈川、安達太良川、湯川、七瀬川、石筵川、水原川、原瀬川、東鴉川、西鴉川等の河川があり、水資源は豊富である。農業用水ダムは岳ダムがある。

(3) 観光

当図葉内には、磐梯朝日国立公園があり、安達太良地区の安達太良山を中心とした区域である。安達太良山は海拔1,700mで、山頂よりの眺めは雄大で、東に阿武隈山脈を一望に収め、西に磐梯山を手にとるようにのぞむことができる。東に広がる勢至平、僧悟台には高山植物も多く、初夏にはしゃくなげ（天然記念物）が咲きみだれ、

秋の紅葉が終ると山麓一帯は、一面白銀のスキー場となり、4月頃まで楽しめる。

有料道路は、磐梯熱海から沼尻までを結ぶ「母成グリーンライン」が昭和51年に開通し、年間約19万台の車が訪れる。

温泉は、5カ所ある。図葉中央部の安達太良山麓にある岳温泉は、標高600mに位置し、泉質は酸性緑バン泉で、胃腸病、神経痛、皮膚病にききめがあり、静かな大自然に包まれた環境は保養地として、また、登山、スキーの拠点として年中湯治客で賑わっている。図葉北西部の湯川沿いにある塩沢温泉は、泉質は単純泉でリューマチス、神経痛、動脈硬化等に非常に効果がある。図葉北西のはしには横向温泉、野地温泉、鷲倉温泉がある。

名所・旧跡は、図葉中央部やや東側に霞ヶ城公園がある。この公園の山腹の石垣は丹羽氏十万七百石の城跡をそのまま公園とし、庭園の美が知られている。公園内には、戒石銘、日影の井戸、洗心亭、二合田用水、二本松少年隊顕彰碑、智恵子抄詩碑、傘松、山田修翁銅像等の見どころがある。また、公園内で毎年10月1日から11月23日まで菊人形まつりが開催され、約30万人の観菊客で賑わう。

霞ヶ城公園の東に二本松神社がある。この神社は、寛永20年（1643年）丹羽光重入部に伴い、元島山時代に白旗ヶ峰に鎮座してあったものを、城の改築の際この清地に遷宮し、丹羽家と領民の守護神とされた。祭神は、向って左が品陀別命、右が佐瑛奈ほんだわけのみこと美命いぎなみのみことであり、藩公自身の守り神を下座に、領民の守り神を上座にまつた。光重公の敬神愛民の精神を窺い知ることができる。領民もこの精神にのっとり、年1回のお祭を行うことを無上の誇りとした。以来祭は3百有年続いており、日本三大提灯祭の1つとして、10月4・5・6日の3日間華しく繰り広げられる。東北地方はもちろん、遠く関東・関西地方よりも観光客が訪れ、その数実に数万を数える。5日の本祭には、市内に神輿渡御が行われ、七台の黄金塗りの太鼓台が笛、鉦、大太鼓、小太鼓の囃子もにぎやかに市内をねりある。また夜は一台に数百の紅提灯がつけられ、その豪華絢爛さは言語に絶するものがある。

図葉東部のほぼ中央には謡曲・歌舞伎劇で知られた安達ヶ原がある。

ほかにスキー場として安達太良高原スキー場、塩沢スキー場がある。また、ライオン・トラ・象・キリン等、約450頭のアフリカ動物放し飼いの中をマイカーで探険で

きる東北サファリパークがある。

(4) 開発の方向

本地域は、国の第3次全国総合開発計画の定住構想を踏まえた「安達地方新広域市町村圏計画」の策定区域である。これは、21世紀を展望して地域の特性を生かしつつ、自然環境、生活環境、生産環境などの調和のとれた安定感のある、安全な総合的居住環境を形成する計画である。

この地域の主なる基本計画は次のとおりである。

1. 交通網の整備

(1) 圏域内交通の見直し

- ① 二本松・本宮への2核集中型という傾向だけでなく、圏域全体を円滑に連絡する交通路線の整備。
- ② 生活圏の拡大に対応した路線の体系化。
- ③ 従来の南北型指向の強い路線のみならず、圏域を貫流する阿武隈川を境に西の安達太良、東の阿武隈山系を相互に連絡するような東西の路線の整備を図り、バランスある交通体系を樹立する。
- ④ 観光レクリエーション、農林業、工業、商業等を地域の機能的特色を生かした交通システムの形成。
- ⑤ 二本松・本宮両インターチェンジへの連絡を高めること。
- ⑥ 公共輸送機関の効率利用。

(2) 新たなネットワークの形成

- ① 大規模幹線の整備
- ② 安達環状線の整備
- ③ 東西連絡線の整備
- ④ 広域連絡線の整備
- ⑤ 生活路線の整備

2. 農林業

(1) 農業

- ① 圏域に相応した複合経営の推進と生活基盤の整備

- ② 地域ぐるみの特産地、主産地の形成
- ③ 集出荷体制の近代化と生産・流通情報網の整備
- ④ 後継者・地域リーダーの育成
- ⑤ 総合的な水資源開発・利用体系にもとづく農業用水の確保
- ⑥ 省資源農業への対応
- ⑦ 生きがい農業への対応

(2) 林業

林業は、現在、圏域経済に寄与するウエイトこそ小さいが、造林の余地は残されており、長期的な資源育成の視点にたって、造林や林道整備を促進する。

3. 工業

- (1) 企業の求める条件の再検討と集中的条件整備
- (2) 市町村の特性に応じた積極的な工業導入
- (3) 適正業種の選択
- (4) 地域に根ざした工業振興
- (5) 市町村連携による基盤整備
- (6) 総合的な水資源開発・利用体系に基づく工業用水の確保

4. 商業

- ① 生活圏に対応した商業核の整備
- ② まちづくりの一環としての商店街の整備・充実
- ③ 圏域の商業核としての二本松・本宮商店街の整備
- ④ 地理的好条件を生かした卸売機能の向上
- ⑤ 商店会・商工会の育成・強化と相互連携の推進

(福島県農地林務部農地計画課主査 猪狩孝一)

各 論

I 地形分類図

本図葉域は福島県中通り地方のほぼ中央部を占める関係上、中通り低地帯をはきんで西に奥羽山脈、東に阿武隈山地のそれぞれ一端を含んでいる。同じ中通りで本図葉の南北に隣る「福島」、「郡山」両図葉域には同名の盆地床が広くひろがるのに対し、本図葉内には丘陵地が半ば以上を占めるため、地形構成が極めて複雑になっている。以下、地形別ならびに地形地域ごとに説明する。

§ 1 各種の地形

(1) 山地・火山地

①大起伏山地…図葉南西端、標高 800～600 m の新第三系凝灰岩類（鈴木・真鍋 1972）からなり、その主体は西隣り「磐梯山」の川桁山地（中村・田崎1977）である。ここはその東斜面の一部にあたるため定高性山稜をみることができず、わずかに30°以上の急傾斜地がひろがることから、大起伏山地の特色のひとつが読みとられる。

②中起伏山地…同じく図葉南西隅と、もうひとつは、図葉ほぼ中央北部とにそれぞれまとまった小山塊として分布する。前者は標高 800～600 m、樹枝状水系をもつ五百川右岸の3支流（石筵川・七瀬川・矢沢川）によって4つの小山塊に分けられる。いずれも傾斜30°前後の急斜面の卓越した壮年山地である。そのうち、離山（605 m）守谷山（795 m）、高松山（641 m）などは紋紋岩からなる残丘状の高まりである。後者は、安達太良山の前山的な位置にあって、標高 700～500 m、水原川および杉田川水系によって十分に開析された晩壮年期の山地である。

③小起伏山地…本宮町北部の富ヶ峰（318 m）を中心とする丘陵状の山地で、黒色片岩などの変成岩類からなる。ほかに、大名倉山東麓にも小規模ながら分布する。

④中起伏火山地…安達太良火山群は、北から鬼面山（1,482 m）、箕輪山（1,718 m）、鉄山（1,709 m）、安達太良山（1,700 m）、和尚山（1,601 m）、前ヶ岳（1,340 m）などの火山帯がほぼ一列に並ぶ複合火山（活動度B級の活火山）である。本火山群の大部分が中起伏火山地に属し、溶岩等の火山噴火物の互層からなるが、激しい火山活動とそれに引き続く崩壊などの地形過程を物語る大規模な爆裂火口壁やおびただしい数の崩壊斜面が目される。火山体の東斜面には侵蝕谷が数多く刻み込み侵蝕性の急崖

・急斜面をよく発達させている。

⑤小起伏火山地…火山碎屑物からなり、火山体の裾野をとりかこむように分布する。小起伏の緩斜面を主とするが、岳グリーン牧場以北では台地状のところが多い。これは、火山碎屑物の堆積のしかたと、火砕流堆積物を含む基盤の地形と深く関わる結果である。

⑥火山麓地…壘石山（720m）の北、自衛隊演習地付近に発達する火山碎屑物からなる緩斜面地で、西側の小起伏火山地から次第に高度を減じている。

⑦山（丘）頂・山腹・山麓緩斜面…山地、火山地、丘陵地を問わず、山頂・山腹ならびに山麓にひろがる小規模な緩斜面・平坦面を図に示した。西半部の山地・火山地には山腹・山麓緩斜面が比較的広く分布するのに対して、東半部の丘陵地には、阿武隈隆起準平原Ⅲ面（中村1960）の名残りを示す標高 330m 程度の定高性丘頂面がよく発達している。

(2) 丘陵地

図葉域東半部に広く分布する起伏量 100m 程度未満の丘陵地で、大部分が阿武隈山地を構成する花崗岩類からなり、一部に黒色片岩などの変成岩帯も含む。十分に発達した水系により細かく開析されているが、南部の起伏量50m 程度の地域には丘頂に平坦面・緩斜面がよく残されている。局地的侵蝕基準面たる阿武隈川から比較的隔ったところにはほぼ全域にわたって麓屑面の発達をみることができる。

(3) 台地

①溶岩台地（溶岩流堆積面）…僧悟台・勢至平・五葉松平・赤木平など舌状にひろがる溶岩台地で、数段の階段状を呈するところや末端が逆傾斜するところなどがある。

②軽石流台地…二本松丘陵の北部、湯川火砕流（吉田ほか1969）の堆積面である。

③土石流台地…水原川右岸支流の上流域で谷壁を埋める土石流堆積面が開析されたものであり、下流側で上位砂礫段丘 GtI⁺に続く。

④火山灰砂台地…岳温泉北部ではロームの下に角礫からなる火山碎屑物、オレンジ色の軽石、火砕流堆積物の順で構成される。

⑤泥流堆積面…山崎泥流（吉田ほか1969）からなる丘陵性台地で、東部ほど下位の GtII⁺ に埋められて比高が小さくなる。

⑥洪積台地…郡山層からなる台地で、南の「郡山」図幅（西村・中村1963）にひろがる台地面の続き。青田原の一部が含まれる。

(4) 段丘

①上位砂礫段丘…Gt I⁺⁺, Gt I⁺は岳温泉を中心とする地溝性凹地に細長くのび、下流側ではGt II⁺に漸移する。

②中位砂礫段丘…大玉村から本宮町北西部にかけてひろがる大玉扇状地（安田1962）のほか、二本松市街ののり面、水原川沿いなどに分布する Gt II⁺が主体で、Gt IIはそれらを切る開析谷沿いに認められるのみである。

③下位砂礫段丘…いわゆる沖積段丘であり、阿武隈川の各支流ごとに樹枝状に発達する。Gt III⁺が圧倒的に広く、Gt IIIの分布は阿武隈川本流に近い部分に限られる。

(5) 低地

図葉域のほとんどの部分が山地・火山地・丘陵地によって占められるため、低地の分布は極く限られている。それはまた、丘陵地の開析谷底や大玉扇状地面などが、すべて阿武隈川の河床面（局地的侵蝕基準面）に対して不協和的に一段高位にあることにもよっている。ただし、安達太良山麓沿いに分布する扇状地・谷底平野はそれらとは別個に形成されたものと考えられるので低地として表示した。

(6) その他

安達太良火山の西斜面に馬蹄型に開く火口壁を中心に崩壊地形が集中し、全体として崩壊地として表示できる広さになっている。急斜面および崖も、同じく安達太良火山の随所にみられ、同火山のもつ秀麗な遠景に似あわず険しい山容が秘められていることがわかる。

花崗岩などの基盤岩の風化生成物が mass movement によって斜面下方に移動・堆積して生じた麓屑面は、その形成条件をよくそなえた阿武隈山地西縁丘陵全域に無数に分布する。

人工平坦地については、丘陵地形が完全に消失して人工的台地になったもののみを示した。なお、本宮町東部に造成中のものがある。

§ 2 各地形地域の特色

地形構成の複雑さに対応して、地形地域は7つ、地形区は26に細分される。とくに

目立つことがらのみを以下に説明する。

A 安達太良火山地

安達太良火山Ⅱaと同火山麓Ⅱbとからなる。吾妻火山が東西にひろがるのに対して、南北にのびる安達太良火山は西風をさえぎる形となり気候に及ぼす影響が大きい。

B 高玉山地

中起伏山地の夢想Ⅰa・西高森Ⅰb・高松Ⅰc・大名倉Ⅰdの各山地からなり、高玉鉾山（閉山）や大規模な採石場（大名倉山）などがある。3本の主要開析谷のうちでは石筵川とその支流水上川に沿って谷底平野とGtⅡ⁺がひろがる。

C 安達太良東麓山地

南北13kmにわたって細長くのびる地壘状山地（安田1962）で、北の笹森山地Ⅰeと南の苗松山地Ⅰfの間には湯川が、Ⅰfのほぼ中央部には原瀬川が、各々先行性横谷をつくっている。

D 本宮低地

西半部の岳台地Ⅳa、山崎台地Ⅳb、大玉扇状地Ⅵc、南部の青田原台地Ⅳdが比較的高燥な地形面を提供するのに対し、北東部の杉田川低地Ⅴb、原瀬川低地Ⅴcと南東部の安達太良川低地Ⅴdは堤防等が完備する以前はしばしば水害を受けやすい低湿地であった。

E 二本松丘陵地

花崗岩類を切って発達する二本松丘陵（小池1965）は、地形構造上は阿武隈北西山麓地（安田ほか1972）の一角をなすが、ここでは主な開析谷沿いの低地を区別して、二本松丘陵Ⅲa、羽石川低地Ⅴe、湯川低地Ⅴfとした。

F 松川丘陵地

花崗岩類を覆う伏拝火砕流（吉田ほか1969）を開析する丘陵地で、東西に細長く平行して走る谷の斜面には、北向きに急斜面、南向きに冬季の活発な mass movement を示す緩斜面（麓屑面）の発達という非対称地形が認められる（高橋1981）。水原丘陵Ⅲb、金沢丘陵Ⅲcのほか、広いGtⅢ⁺を伴う水原川低地Ⅴhと、阿武隈川本流に近いGtⅢを発達させる駒寄川低地Ⅴgとに分けられる。

G 阿武隈山地西縁丘陵地

小起伏、高い谷密度、平坦地・緩斜面の卓越といった阿武隈山地西縁丘陵の特色に加えて、開析谷系相互間における河川争奪（ないしはその進行中）、非対称斜面、通谷、高位谷（Nakamura 1969）などが到るところに分布する。本丘陵地は、阿武隈川をはさんで安達丘陵 III d, 白沢丘陵 III e, 富ヶ峰丘陵 III f に分けることができる。

参 考 文 献

- 小池一之（1965）：阿武隈川中流域の地形（短報）地理学評論 38 519—525
鈴木敬治・真鍋健一（1972）：20万分の1表層地質図「福島県」経済企画庁
高橋正之（1981）：阿武隈山地西縁丘陵の地形 福島大学教育学部卒業論文（手記）
中村嘉男（1960）：阿武隈隆起準平原北部の地形発達 東北地理 12 62—70
Nakamura, Yoshio (1969) : High-level valleys in Joban Coastal Region with reference to dissection features of upland Sci. Rep. Tohoku Univ. 7th Ser. (Geogr.) 18 1—21
中村嘉男・田崎敬修（1977）：5万分の1地形分類図「磐梯山」福島県
西村嘉助・中村嘉男（1968）：5万分の1地形分類図「郡山」経済企画庁
安田初雄（1962）：本宮町の自然環境「福島県本宮町総合調査」7—20 本宮町
安田初雄・大澤貞一郎・渡辺四郎（1972）：20万分の1地形分類図「福島県」経済企画庁
吉田 義・伊藤七郎・鈴木敬治（1969）：東北地方南部の阿武隈川流域の第四紀編年と2・3の問題「日本の第四系」地団研専報 15 99—125

（注）地形分類図の作成ならびに説明書の執筆は、図葉内西半部 II a, II b, I a, I b, I c, Vaの範囲を田崎が、北東部 I e, III a~d, Ve~hの範囲を高橋がそれぞれ担当し、その他の地域のすべておよび全体の調整を中村が担当した。また傾斜区分図、水系・谷密度図作成にあたっては福島大学教育学部学生藤枝浩、星峰夫、千坂実各君の協力を得た。

福島大学教育学部教授

中 村 嘉 男

会津若松市立謹教小学校教諭

田 崎 敬 修

富岡町立富岡第一小学校教諭

高 橋 正 之

II 表層地質図

本図葉の東部の高度 400 m 以下の丘陵性の山地域には、結晶片岩を主とする変成岩 (Sch) とこれを貫入する花崗岩質岩石 (Gr) とが広範囲に分布している。この地域の南部で北東に流れる阿武隈川とその支流 (安達太良川・杉田川・原瀬川・湯川・水原川など) の谷には、段丘堆積物 (gsm(1), gsmp(1), gsmp(2), gsmp(3)) や安達太良火山群起源の火山砕屑物 (Py I, Py II, Py III) などの未固結堆積物がよく発達している。さらに、丘陵性山地の頂部や緩斜面の一部を占めて、半固結堆積物 (gsm(2), gsmp) が散点的に分布する。

二本松以北の松川町東部を中心とする地域には、中新世末 (或は鮮新世) の固結堆積物 (sst) や中新世の淡緑色凝灰岩・シルト岩などからなる海成の固結堆積物 (tss) および流紋岩質岩石 (Ry I, Ry II) などが各所に分散して分布する。

一方、本図葉の西部の高い山地域には、中新世に形成された固結堆積物 (altmst, ctsm, fts) や火山性堆積物 (Ry I, Dt) などを基盤として、安達太良火山群を構成する第四紀の火山性堆積物 (Py II, Py III, Ag I など) が広く発達している。

本図葉の東部と西部の境界付近にあたる中央部は、より複雑な地質構成となっている。北方の笹森山周辺の地区では、変成岩・花崗岩質岩石・固結堆積物 (tss, sst) ・半固結堆積物 (gsmp) などをおおって、安達太良火山群起源の火山性堆積物よりは古期の火山性堆積物 (Ag II, Py IV) が発達している。二本松市街地西方から岳温泉東の地区では変成岩と花崗岩質岩が、火山性堆積物に被覆されながらもよく発達している。おそらく北方の地区の Ag II や Py IV の火山性堆積物の下には、変成岩や花崗岩質岩石が伏在しているものと推測される。杉田・本宮西方の南部の地区では、安達太良川・杉田川の谷が広い範囲を占めるが、山地では変成岩や花崗岩質岩石の分布はほとんどみられず、fts からなる固結堆積物や Ry I, A₆ からなる火山性堆積物が丘陵或は山地を構成して、顕著に発達している。

安達太良火山の東側には、安達太良火山灰層が広い範囲に分布している。安達太良火山灰層は古いものから A₅・A₄・A₃・A₂・A₁・A₀ の 6 層に区分されているが、そのうち、A₃～A₀ の火山灰層の積算平均層厚が図示されている。

これらの表層地質は、第1表に示したように、大区分で7、細分すると27になる。安達太良火山群の火山体の火山性堆積物の区分については、岩永将暉(1964)の区分を参考にしてまとめてある。本図葉の西部をのぞく過半の地域は1/6万の地質図はみられないところであり、今回の調査によって明らかとなった点が多い。したがって、新たに層名や部層名を提唱したものがいくつかあることをおことわりする。

1 未固結堆積物

阿武隈川およびその支流の水原川・湯川・杉田川・原瀬川・安達太良川・その他の谷を埋積して発達する。特異なものとしては安達太良火山群の爆裂火口や山腹地に崩積性の堆積物(c1)がみられる。

前記の諸河川の河床には礫・砂からなるgsが分布するが、一般にその発達は無弱である。また、河谷には3～4段の段丘堆積物(gsm(1), gsm(1), gsm(2), gsm(3))が発達するところが多い。とくに、水原川・杉田川・安達太良川ぞいの谷部に発達が顕著である。gsm(1)の堆積物は、阿武隈川やその支流の下流部では沖積世の礫・砂・泥からなるが、より上流部やその支谷では直接更新世(洪積世)末の泥炭をはさむ礫・砂・泥から構成されるところが多い。とくに、東部の山地域でその傾向が顕著である。またgsm(1)の堆積物中、杉田川・定達太良川が流れる広い谷を埋めて発達するものが顕著で、扇状地成の礫を主とする最大10m程度の厚さに達する堆積物(大玉層)で、段丘化した扇状地をつくっている。gsm(2)は一般に小規模に各所に分布するが、松川駅付近のものが比較的発達が顕著である。gsm(3)は、本宮町の市街地付近、杉田川ぞい、松川南方にまとまって発達するほかは、小規模な分布が点在する。未固結堆積物とはいいながらいくらか固結が進んだ礫・砂・泥・泥炭などからなり、凝灰岩を挟在することが多く、A₄(安達太良第4火山灰層)と密接な層位関係を示すところが多い。gsm(3)は、郡山図幅の郡山面とよばれる台地面を構成する郡山層の延長又はそれに対比されるものであり、更新世中期のものと考えられている。gsm(2)やgsm(1)は更新世後期のものと考えられ、とくにgsm(1)は最終氷期の堆積物である。gsm(2)はA₂火山灰層に間に挟み、A₁とA₀の火山灰層でおおわれる。また、gsm(1)は安達太良火山灰層A₀でおおわれているところが見られる。

第1表 表層地質区分

大区分	小区分	堆積物・地層名	地質時代	
			第四紀	新第三紀
未固結堆積物	礫・砂・泥(1) 礫・砂・泥・泥炭(1) 礫・砂・泥・泥炭(2) 礫・砂・泥・泥炭(3) 碎屑物	現河床および氾濫原堆積物 沿道地堆積物 低位段丘堆積物、休石原層 大玉層 二本松層 郡山層 崩積性堆積物	完新世 / 更新世	更新世
		安達ヶ原Ⅱ層 清水町層		
固結堆積物	凝灰岩質砂岩・シルト岩・礫岩質軽石凝灰岩 細粒凝灰岩・真珠岩質凝灰岩・凝灰岩質砂岩 ・シルト岩 礫岩質凝灰岩・淡緑色斑凝灰岩・細粒凝灰岩 ・凝灰岩質砂岩・泥岩 淡緑色凝灰角礫岩・凝灰岩質シルト岩・砂岩 ・細礫岩 泥岩・砂岩・凝灰岩の互層	松川層 (新稱) 原瀬層 (新稱) 深沢層 (深沢凝灰岩を改稱) 岩倉層 (新稱) 土湯峠層	中	新第三紀
火山性堆積物	火山碎屑物Ⅰ(軽石およびスコリア流堆積物) 火山碎屑物Ⅱ(火山碎屑流堆積物および火山放出物) 火山碎屑物Ⅲ(火山碎屑流堆積物および降下碎屑物) 安山岩質岩石Ⅰ(熔岩・集塊岩) 火山碎屑物Ⅳ(火山碎屑流堆積物) 安山岩質岩石Ⅱ(安山岩熔岩・凝灰角礫岩) 安山岩質岩石(安山岩熔岩・同角礫岩) 石英安山岩質および流紋岩質凝灰角礫岩 流紋岩質岩石Ⅰ(真珠岩熔岩・回質凝灰岩)	湯川火砕流堆積物 山崎泥流沼ノ平火砕流および敦山火砕流堆積物 新期火山砕屑物 安山山古期火山砕屑物 鉄山第1~8熔岩、和高山下部~頂上部熔岩、箕輪山下部 ~頂上部熔岩、鬼面山熔岩、竜山熔岩 伏拝火山砕屑流堆積物 椎森山・黒森山安山岩 大名倉山安山岩 木地小屋層 若根流紋岩・苗松山流紋岩(新稱)・羽黒山流紋岩(新稱)	完新世 / 更新世	第四紀
火山岩	流紋岩質岩石Ⅱ(石英粗面岩) 安山岩質岩石(石英安山岩・安山岩)	貫入岩 貫入岩	新	第三紀
深成岩	花崗岩質岩石	角閃石・黒雲母花崗閃緑岩・黒雲母花崗岩	中	第三紀
變成岩	結晶片岩類	黒雲母片岩・雲母片岩・綠泥石片岩・角閃片岩・蛇紋岩	先	第三紀

2 半固結堆積物

本図葉東部の丘陵性の山地域に、点的に分布するが、gsm_pの堆積物は松川町地内に比較的まとまったものがみられる。gsm(2)は二本松市街地周辺に小規模なものが点的に分布するのみである。gsm(2)と gsm_pは、前者がより低い高度のところに後者がより高い高度のところに分布するというちがいはあるばかりでなく、前者は A₅火山灰層により整合におおわれるが、後者はそのような関係はみられない。また、gsm(2)は礫・砂・泥からなるが、gsm_pは礫・砂・泥のほか凝灰岩を多くともなう特徴がある。両者ともに、地表にちかいところでは風化が進んでいる特徴がある。gsm(2)は、いくらか古い（更新世中期）の段丘堆積物と考えられ、gsm_pは更新世前期の陸水成の堆積物であり、福島盆地の南縁丘陵に発達する清水町層に対比されると考えられる。

3 固結堆積物

いずれも新第三紀に積成されたものであるが、比較的固結度の進んでいない sst、ftsと固結度のかなり進んでいる cfsm、tss、altmst とに大別される。

sst（松川層・新稱）は松川駅北方の丘陵地と山ノ入南方の丘陵地に分布する。凝灰岩質砂岩・シルト岩や軽石質凝灰岩などからなり、礫岩質のところもある。葉理がよく発達し、細かい互層状を呈することを特徴とする。10°前後のゆるい傾斜で分布し、50 m土の厚さである。植物の破片や保存良好な化石を産し、中新世末（又は鮮新世初期）のものと考えられる。fts（原瀬層・新稱）は杉田西方の苗松山周辺に分布し、細粒凝灰岩・真珠岩質凝灰岩・凝灰岩質砂岩・シルト岩などからなり、葉理がよく発達し細かい互層状を呈するところが多い。30°程度の傾斜で分布するところが多く、苗松山付近に発達する火山性堆積物（Ry I、真珠岩熔岩）と交叉移行している。少なくとも200 m以上の厚さを有し、植物化石を産し、sst（松川層）と同じ時期に形成されたと考えられる。sst（松川層）・fts（原瀬層）はともに陸水成層と考えられるが、その発達に大きな差のあることが地質構造発達史の解析の上で注目される。

cfsm（深沢層）は、本図葉の西南部の脊稜山地域に広く分布する。礫岩質凝灰岩・淡緑色凝灰岩・細粒凝灰岩・凝灰岩質の砂岩・泥岩などからなり、互層状のところが多い。20°～30°の傾斜を有するところが多く、層厚も数百 mを下らない。地質構造も断層で切られたり褶曲したりするところが多いが、その詳細は明らかでない。この堆

積物は中新世中期に積成された海成層で、fst（原瀬層）により不整合におおわれている。

tss（岩倉層・新稱）は、本図葉の北東部の松川町周辺に点在して分布する。比較的まとまったものは、岩倉東方の川俣図幅内にみられる。淡緑色や灰白色の凝灰岩・凝灰岩質シルト岩、砂岩、細礫岩などからなり、シルト岩にはよく葉理が発達し黒色のものが多い。シルト岩や砂岩中には海生の貝化石や陸生の植物化石を含み、海成の中新世中期の地層であることを示している。分布が断片的で構造をよく把握することは困難であるが、かなりの角度の傾斜で分布するところが多く、複雑な構造のものと推測される。基盤をなす花崗岩質岩石とはアバツトないし断層で接しているところが多い。また、羽黒山周辺に分布する流紋岩質岩石 I（Ry I）はほとんど真珠岩質であるが、これと周辺の tss（岩倉層）は交叉移行の関係にある。現在は tss は断片的に点在しているが、堆積当時は羽黒山周辺や岩倉東方地域などに、海底の積成盆地が発達していたであろうことが推測される。層厚は 100 m 土程度で、cfsm（深沢層）やつぎにのべる altmst（土湯峠層）にくらべてかなり小さいと推測される。

altmst（土湯峠層）は、本図葉の北西部のごく小範囲に分布する。泥岩・砂岩・凝灰岩の互層状の地層からなり、中新世前～中期の海成層であることが知られている。

4 火山性堆積物

本図葉における火山性堆積物は、①安達太良火山群起源のもの（Py I, Py II, Py III, Ag I）、②それより少し古い更新世前期に形成されたもの（Py IV, Ag II）および③第三紀（主に中新世）に形成されたもの（Ab, Dt, Ry I, Ry II, An）の 3 つに大きく分けることができる。また、①にともなうつくられた降下火山灰層はほとんど全域に分布している。

Py I（湯川火砕流堆積物）は、木ノ根坂付近より下流の湯川の谷ぞいに分布し、その末端は二本柳付近まで達している。一部溶結している軽石流とスコリア流堆積物を主とし、降下軽石層や降下スコリア層もともなう。最大 20～30m の厚さに達する。

Py II（山崎泥流・沼ノ平火砕流・鉄山火砕流および新时期火山砕屑物）は、鉄山付近と安達太良火山群の山麓斜面に広く分布している。鉄山付近と石筵付近には鉄山火砕流と沼ノ平火砕流の堆積物が分布し、本宮北西方には山崎泥流が分布し、その他に

は新期火山砕屑物が分布する。鉄山火砕流と沼ノ平火砕流は、発泡のわるい軽石とスコリアのまじる火山灰質の火砕流で一部溶結しているところがある。厚さは30~40m程度である。山崎泥流はドライアバランチ型の火山泥流で、安山岩の岩塊を多量に含んでおり、20m以下の厚さである。箕輪山北東方には新期火山砕屑物が分布するが、火山泥流・降下軽石層や火山灰層をはさむ泥流など各種の堆積物からなる。正確な厚さは不明だが、数十m以上の厚さに達するところがある。形成の時期もかなり長期間（更新世後期から完新世）にわたっている。

Py III（安達太良火山古期火山砕屑物）は安達太良火山群の東側山麓を占めて発達するが、一部は南麓にも分布する。角礫質・ラピリ質凝灰岩や軽石質凝灰岩からなる火山砕屑流堆積物を主とし、一部に降下堆積物もともなう。厚さは、20m以上に達し、かなり部分がよく風化されて粘土化している。

Ag Iは安達太良火山群の山体の比較的高いところを占めて分布する。塩沢温泉付近では比較的低いところまで分布する。安山岩の熔岩や集塊岩からなり、鉄山第1~8熔岩、和尚山下部~頂上部熔岩、箕輪山下部~頂上部熔岩、鬼面山熔岩、籠山熔岩などに区分されているが、本図葉では一括図示してある。（ただし、各熔岩の境界は表層地質図中に点線で示しておいた）。

Py IV（伏拝火山砕屑流堆積物）は、福島図幅の南部から連続分布し、本図葉では松川町西部から二本松市原瀬まで分布する。この堆積物は安山岩質の火山泥流を主とし、軽石質火山砕屑流堆積物をともなう。表層はかなり風化しているところが多い。伏拝火山砕屑流堆積物は清水町層の比較的上部を占めて発達する一部層である。

Ag IIは笹森山と黒森山付近に分布し、安山岩質の熔岩と凝灰角礫岩とからなる。安山岩中には灰長石の巨斑晶を含む。分布上、Py IVの堆積物とは密接な層位関係にあると判断される。

Abは本宮西部の大名倉山付近に分布し、安山岩質の熔岩と凝灰角礫岩とからなり、一部で採石が行われている。fts（原瀬層）やRy I（岩根流紋岩）をおおって分布し、おそらく鮮新世の堆積物と考えられる。

Dt（木地小屋層）は本図葉北西部に分布し、石英安山岩質や流紋岩質の凝灰岩や凝灰角礫岩などからなる。altmst（土湯峠層）を整合におおって発達する中新世中期の

火山性堆積物である。

Ry I (岩根流紋岩、苗松山流紋岩および羽黒山流紋岩) は、本図葉北東部の羽黒山付近に分布する羽黒山流紋岩と本図葉南部の大名倉山周辺に分布する岩根流紋岩および苗松山付近に分布する苗松山流紋岩とからなる。いずれも真珠岩質の熔岩と凝灰岩からなる。羽黒山流紋岩は tss (岩倉層) の堆積時に形成され、岩根流紋岩や苗松山流紋岩は fts (原瀬層) の堆積時に形成されている。

5 火山岩

本図葉においては、流紋岩質岩石 (Ry II) と安山岩質岩石 (An) の2つが貫入岩体として発達している。前者は各所にみられるが、後者はきわめて小規模に分布がみられるのみである。

Ry II は本図葉北東部の松川町関根付近にいくつかの小規模な岩体として分布する。変成岩や花崗岩質岩石を貫入しているほか、tss (岩倉層) も貫入している。

一方、Ry II は本図葉の南西部の守谷山・西高森などにいくつかの貫入岩体がみとめられる。必ずしもすべての産状が明確ではないが、cfsm (深沢層) を貫入しているところが数ヶ所でみだされる。これらの岩体の流紋岩中には黄鉄鉱などを含むものが多く、いくらか変質している。三森付近では採石が行われた露頭がある。

An (安山岩質岩石) は、本図葉北部の荒川の支流の東鴉川付近と松川駅北方金沢とに、小規模な分布がみられる。これらの岩体の産状は必ずしも明確ではないが、分布の形態からみて貫入岩体であろうと考えられる。

6 深成岩

本図葉における深成岩としては、花崗岩質岩石 (Gr) のみが、東半部の地域に限定されて分布している。しかし、その分布面積はきわめて広い。黒雲母角閃石花崗閃緑岩や黒雲母花崗岩などからなり、また形成の時期をことにするいくつかの岩体に区分されている。一般に、表層部では真砂化したところが多く、その深度は10m以上に達するところもみだされる。真砂化の進んでいるところと新鮮な花崗岩質岩石が地表ちかくまで分布しているところとは、かなり近距離で移りかわるようなところが多く、真砂の分布はそれほど規則性がないように思われる。

7 変成岩

本図葉の変成岩 (Sch) は、本図葉の中央部を NS 方向に帯状に分布している。二本松市街地西方で最も幅広く、約 4 km に達している。より北方では、PyIV や AgII の火山性堆積物でおおわれ、実態は不明である。杉田以南では、分布の幅が急激にせばまっている。黒雲母片岩、雲母片岩、角閃石片岩、緑泥石片岩および蛇紋岩などがらなり、片理も N-S 方向を示すところが多い。表層部では細片化しているところが多い。花崗岩質岩石との境界は、ほぼ N-S 方向にのびる傾向を示すが、とくに大規模な断層や破碎帯が発達しているところはみとめられなかった。

8 地質構造

本図葉の地域の地質構造は、東半部と西半部とで大きく特徴を異にしている。北部では、PyIV, PyII などでおおわれ不鮮明となっているところが多いが、杉田川支流の烏川の南北の谷を境にして、東西両側の地区の地質構成や地質構造は大きく異っている。新期の火山性堆積物や段丘堆積物におおわれ、断層の存在は確認はできなかったが、岳温泉や岳温泉横森付近の花崗岩質岩体中にはかなり顕著な N-S 性の破碎帯がみとめられる。おそらく、新期の火山性堆積物や段丘堆積物の積成以前の時期に N-S 性の断層や破碎帯を形成する運動が行われたと推測される。

岳温泉横森付近から南へは、花崗岩質岩体や変成岩体がそのまま延長・分布しないで、原瀬付近では fts (原瀬層) や Ry I (苗松山流紋岩) で占められている。直接の境界は明確ではないが、花崗岩質岩体や変成岩体に対する fts の関係は、ほぼ NW-S E 方向の境界でアバツト的に接していると推測される。fts や Ry I は本宮の西にも分布し、花崗岩質岩体や変成岩体との境界は、岳温泉付近の地区におけるよりも、より東側にずれた N-S 方向の断層あるいはアバツトで接していると推測される。

以上にのべた、北から N-S, NW-SE, N-S の折れまがりを示す伏在構造 (断層又はアバツト) を境にして、その東側には花崗岩質岩石と主に N-S 方向の片理が発達する結晶片岩が分布する。結晶片岩は N-S 方向に帯状に分布し、花崗岩質岩体との境界も N-S 方向を示している。しかし、断層などの構造の存在は認められなかった。これらをおおって、中新世の tss (岩倉層) をはじめ、新第三紀や第四紀の堆積物が分布している。tss は花崗岩質岩体に対して、アバツトや断層で接するところが多い。中新世末 (或は鮮新世) の sst (松川層) と第四紀の半固結・未固結堆積物は、古

期のものから新期のものへと、高い山腹地や丘頂部から低い段丘などに順々に配置している。なお、二本松から安達にかけての地域と松川町の地域とにおける同じ時期の堆積物がかなり大きく高度を異にして分布する特徴を示している。すなわち、後者の地域では20~30mほど高度を減じている特徴を示している。

一方、先にのべたN-S, NW-SE, N-S方向の構造の西側の地域にはcfsm(深沢層), altmst(土湯峠層), Dt(木地小屋層)などの中新世の堆積物が広くかつ厚層に発達している。安達太良火山群を構成する火山性堆積物で被覆されている範囲が広く、地質構造は余り明瞭ではないが、断層や褶曲の発達がみられる。また、岳温泉付近から原瀬にかけてと大名倉山北方の地域にはfts(原瀬層)が、上記のcfsmを不整合におおってかなりの厚さで発達している。さらに、本図葉の西端部には川桁山地(磐梯山図葉)に広く分布する花崗岩質岩石が分布し、cfsmで不整合におおわれている。

本図葉東部の結晶片岩や花崗岩質岩石が広く発達する地域に分布する半固結・未固結堆積物は、先にのべたように、典型的な段丘状の配置をとって分布する。これに対して、より西側の未固結堆積物や新しい火山性堆積物(Py I, Py II, Py III)などは、西から東へ低下しながら、末端部では谷を埋積して発達する形をとり、大玉層などは段丘化した扇状地堆積物の特徴を示している。

応 用 地 質

1 地下水

本図葉内には非容水性の岩体が広く分布し、地下水を採取しうる条件を備えている地域はせまい。しかし、局地的ながら、花崗岩類・変成岩類などからなる基盤岩が浸食されて形成された埋没谷中の砂礫層、花崗岩類の風化部、溶岩類中に日量数100m³程度採取できる地下水が含まれていることがある。

二本松市市街地周辺の阿武隈川支川には、厚さ数~20m程度の大玉層・二本松層が分布し、それらの下部を構成する礫層が少量の地下水を産する。この礫層は広く不圧帯水層となり、局地的に被圧帯水層となっている。大玉層・二本松層の基盤をなす花崗岩類の上部は、厚さ10~20m程度風化し、層状にわずかの不圧地下水を含んでいる。

井戸の深さは、一般に50mより浅い。地下水の採取量は、不圧地下水、被圧地下水を問わず、日量100～300m³程度の井戸が多く、ごくまれに800m³に達するものがある。大玉層・二本松層中の地下水は、水質が悪く、飲用に適さない場合がある。二本松市街地や杉田付近の上記両層は泥岩や泥炭質泥の地層をはさみ、これが水質に係わっている可能性が考えられる。

岳温泉の東を南北に流れる原瀬川の西部には、溶岩類で構成される緩斜面が発達する。同斜面は標高550～600m付近で急崖をもって段丘や低地に接している。この急崖下及び原瀬川の支川が造る小谷底には、溶岩を帯水層とする良質の湧水群がみられ、その量は、一部の箇所では日量数1000m³に達している。湧水は、大部分二本松市の上水道水源として利用されている。上記緩斜面と原瀬川にはさまれた段丘下には、一部溶岩が発達し、良い被圧帯水層を形成している所もある。

湯川沿いには深さ40mにも及ぶ埋没谷が発達し、帯水層となりうる砂礫層によって埋められている。笹屋付近では、さらにその下位に清水町層相当の砂礫層が30m以上の厚さで発達し、比較的良好な帯水層を構成している。

2 温泉・変質

本図葉中の安達太良火山群とその周辺には、緑ばん泉・単純泉などの泉質をもつ温泉が多数分布している。安達太良火山群の北西部に噴気注水の野地・鷲倉の温泉があり、安達太良火山群の東麓部には塩沢・岳・安達太良の温泉がある。塩沢・安達太良の両温泉はボーリングによる動力揚湯であるが、岳温泉は安達太良火山群の沼ノ平に湧出する温泉水を引湯しているものである。一方、安達太良火山群西麓には中ノ沢・沼尻の温泉があり、さらに北方には横向温泉がある。いずれも、自然湧出のもので、横向温泉の一部に動力揚湯のものがある。以上の温泉の概況は第2表に示したとおりである。

第2表 温泉の概況

名 称	源泉数	温 度	湧出量	泉 質	備 考
野地・鷺倉温泉	9	95~45 °C	ℓ/分 76~2	単純泉、単純緑ばん泉 単純硫化水素泉	自然湧出、噴気注水
塩 沢 温 泉	1	32	40	単純泉	動力揚湯
岳 温 泉	7	66~63	900	酸性緑ばん泉	自然湧出、岳まで8.5 km引湯
安 達 太 良 温 泉	1	33	97	単純泉	動力揚湯
横 向 温 泉	5	47~33	79~14	単純泉	自然湧出、一部動力揚 湯
中ノ沢・沼尻温泉 (源泉)	1	56.5	9000 (豊水期)	含硫化水素強酸性明ば ん・緑ばん泉	自然湧出、5 km引湯利 用

※ 福島県の温泉 (1964)、福島県の温泉調査報告 1 (1964) による。

また、本図葉の西半部の安達太良火山群とその周辺の地域には、熱水と噴気によって変質作用をこうむっているヶ所が多数みとめられる。それらは表層地質図中に示してあるが、主なところは安達太良火山沼ノ平、鉄山東、和尚山東、船明神山南、箕輪山北、荒川支流の西鶉川から東鶉川にかけて、および野地・鷺倉温泉などの地域で、安達太良火山群の火山活動とかがわっているものが多いと判断される。

3 鉄床

本図葉中には中新世の堆積物や火山性堆積物および火山岩がかなり発達する地域があり、鉱化作用をうけているところがみいだされる。その一つは、本図葉北東部の安達町渋川付近にみられ、羽黒山流紋岩体の一部が後火山作用により陶石となっている鉱床 (安達陶石鉱山) があり稼行されている。このほか、松川と水原との境界付近には金・銀を産した旧鉱山がある。一方、本図葉の西南部にはcfsm中に胚胎する金・銀鉱床やカオリン鉱床がある。長年にわたって稼行され、現在廃鉱となっている高玉鉱山が最も代表的なものである。このほか、和尚山北東にカオリンを胚胎する安達太良カオリン鉱山があった。

一方、猪苗代町高森付近には、かつて採掘された褐鉄鉱床があり、沼尻山付近には硫黄鉱床がある。以上の鉱床の概況は、第3表に示しておいた。

第3表 おもな鉱床

鉱山名	所在地	堆積物等	鉱床のタイプ	採掘鉱石	備考
松川	福島市松川町	Gr	脈状	金・銀	他に松川南がある
松川	福島市水原関根	Gr	脈状	金・銀	
小池	福島市松川小池	Gr tss	脈状	金・銀	
信夫	福島市水原	Gr	脈状	金・銀	
高玉	郡山市熱海高玉	ctsm	脈状、塊状	金・銀・カオリン	
守谷	郡山市熱海守谷山	ctsm	脈状	金・銀	
吾妻	猪苗代町高森白水沢	FeO(OH)·nH ₂ O	鉱泉・沈積性	褐鉄	
朱沢	猪苗代町高森朱沢	FeO(OH)·nH ₂ O	鉱泉・沈積性	褐鉄	
沼尻	猪苗代町沼尻山	AgI	鉱染状	硫黄	
岳硫黄	二本松市永田	AgI	鉱染状	硫黄	
安達太良カオリン	大玉村前岳	AgI	熱水変質	カオリン	
安達陶石	安達町渋川	RyI	脱玻璃作用	陶石	稼行中

4 地すべり、崩壊地

安達太良火山群の山腹斜面や山麓に分布する火山性堆積物中に多くみられ、崩壊地が多い。とくに、鬼面山・箕輪山の北側の急斜面の地域に多く、また熱水・噴気による変質作用をこうむった地域に多く発生している傾向がみられる。

参 考 文 献

- 岩永将暉（1964）安達太良火山温泉調査報告、福島県温泉調査報告第1号、福島県厚生部。
- 小山 侃・千葉 茂・郷原保真・吉田 義（1964）福島盆地南部地域および二本松地域の地下水調査報告、福島県商工労働部。
- 北村 信・鈴木敬治・小泉 格・小林良明・和久紀生・大山広喜・新妻信明・白田雅郎・小原繁夫（1965）福島県5万分の1地質図幅説明書「猪苗代湖東方地域」福島県
- 吉田 義・伊藤七郎・鈴木敬治（1969）東北地方南部の阿武隈川流域の第四編年と2・3の問題、地団研専報 15, P. 99—124.

渡辺万次郎ほか篇 (1964) 福島県鉱産誌、福島県

福島県立福島北高等学校	吉 田 義
福島大学教育学部地学教室	鈴 木 敬 治
福島大学教育学部地学教室	真 鍋 健 一
福島大学教育学部地学教室	中 馬 教 允
福島県安達郡岩代町立小浜中学校	伊 藤 七 郎

Ⅲ 土 壤 図

台地および低地の土壌

【黒ボク土】

(1) 黒ボク土壌

表層に黒色または黒褐色の腐植層をもつ火山灰土または火山灰質土であり、腐植層の厚さは、多くは20～60cmの範囲にある。農地造成地や基盤整備地では埋没土層のみられるところもある。

・切粘統：表層は腐植含量5～10%、腐植層の厚さは20～50cmである。次層は腐植含量の少ない褐色の粘質または強粘質土であり、下層は黄褐色または明褐色の強粘質土になる。土地利用は畑であり、郡山市の石筵や岳地区の造成地に分布する。生産力の中。

(2) 多湿黒ボク土壌

表層は腐植質火山灰土であり、下層は腐植含量の少ない黄褐色ないし灰褐色の土壌である。

・三合内統：表層は腐植含量5～10%、腐植層の厚さは20～40cmである。土性は主として粘質であるが、一部強粘質もある。30cm内外から褐色の粘質または強粘質土となり、50cm内外から礫含量20%以上の黄褐色の土層となる。土地利用は水田で、石筵や岳地区などに分布する。生産力はやや低い。

(3) 淡色黒ボク土壌

火山灰土であるが、土色暗褐で腐植含量5%に達しない土壌である。

・清水統：火山灰土であるが、表層の腐植含量は5%以下である。土性は主として粘質であるが、壤質もある。下層は黄褐色の粘～強粘質土である。土地利用は畑で岳地区、大玉村の玉井などに分布する。生産力はやや低い。

・土船統：火山灰土であるが、表層の腐植含量は5%以下である。土性は壤質～粘質であり、地表下40cm内外から礫層となる。土地利用は畑で福島市の水原、大玉村の安達太良山麓などに分布する。生産力はやや低い。

(4) 淡色多湿黒ボク土壌

火山灰土であるが、土色は暗褐ないし灰黄褐で腐植含量5%以下の土壌である。土

層中に鉄やマンガンの斑紋のみられるのが特徴である。

- 横堀平統：火山灰土であるが、表層の腐植含量は5%以下である。土性は主として粘質土であり、地表下50cm内外から礫層となる。土地利用は水田であり、大玉村の安達太良山麓、福島市の水原などに分布する。生産力はやや低い。

- 南小屋統：火山灰土であるが、表層の腐植含量は5%以下である。表層は暗褐色の粘質～強粘質土で、下層は灰褐色ないし黄褐色の強粘質土である。土地利用は水田であり、安達太良山山麓に散在する。生産力はやや低い。

【褐色森林土】

(1) 褐色森林土壌

本土壌は褐色ないし暗褐色の表層をもち、次層は一般に黄褐色を呈する。農地造成地や基盤整備で表土がはぎとられ表層より黄褐色の土壌となっているところもある。母材は主として残積、崩積および洪積世堆積である。

- 守山統：主として安山岩質の岩石を母材とする残積または崩積土で、表層、次層とも腐植含量の少ない褐色の粘質または強粘質土である。土地利用は畑で安達太良山麓や福島市の下川崎などに分布する。生産力は中。

- 上川崎統：花崗岩を母材とする残積または崩積土で、土性は主として強粘質土であるが、一部粘質土もある。表層は暗褐～褐色であり、下層土は腐植含量の少ない褐～黄褐色の土壌である。土地利用は畑であり、福島市の松川や白沢村などに分布する。生産力は中。

- 新殿統：花崗岩を母材とする残積または崩積土で、表層は暗褐色であり、下層土は腐植含量の少ない褐～黄褐色の土壌である。土性は表層、次層とも壤質～粘質土である。土地利用は畑であり、二本松市や安達町の阿武隈山系地域に分布する。生産力は中。

【赤黄色土】

(1) 黄色土壌

段丘地に分布する土壌で、全層あるいは次層以下が黄褐色を呈し、一般に腐植含量少ない。土性は粘土質ないし強粘質である。

- 瀬樋内統：表層は腐植含む褐灰の強粘質土または粘質土、次層も腐植含む灰～褐灰

の強粘質土である。地表下30cm内外より腐植欠く黄色系の強粘質土となる。表層から下層まで膜状、管状などの斑紋がみられる。土地利用は水田であり、大玉村の玉井などに分布する。生産力の中。

- ・枇杷沢統：表層は腐植の少ない灰黄褐～褐色の強粘質土であり、地表下30cm内外より腐植欠く黄色系の強粘質土となる。表層から下層まで膜状、管状などの斑紋がみられる。土地利用は水田であり、本宮町の青田に分布する。生産力の中。

【褐色低地土】

(1) 褐色低地土壌

谷底平野などに分布する全層あるいはほぼ全層が黄褐色の土壌である。土性は砂質～粘質の各種がある。

- ・石畑統：表層、次層とも腐植含量の少ない黄褐色の砂質土である。土地利用は畑であり、阿武隈川の後背地などに分布する。生産力の中。

- ・横塚統：表層は腐植含量2～4%、黄褐色の粘質土であり、下層は腐植含量の少ない褐色の粘質～強粘質土である。土地利用は畑であり、松川町、二本松市の中ノ目などに分布する。生産力はやや高い。

【灰色低地土】

(1) 細粒灰色低地土壌

全層あるいはほぼ全層が灰色または灰褐色を呈する土壌で、土性は粘質または強粘質である。

- ・杉田統：表層は灰色または灰褐色の粘質～強粘質土であり、次層以下は灰色の強粘質土である。全層に膜状、管状の斑紋がある。土地利用は水田であり、松川町、二本松市の原セおよび正法寺、本宮町などに分布する。生産力の中～やや高い。

- ・玉井統：表層は灰色または灰褐色の粘質～強粘質土であり、次層以下は灰褐色の強粘質土である。全層に膜状、管状の斑紋がある。土地利用は水田であり、松川町、二本松市の北東部や杉田、大玉村などに分布する。生産力は高い。

- ・南町統：表層は灰色または灰褐色の粘質～強粘質土であり、地表下30cm内外から洪積世の堆積物を母材とする灰褐色の強粘質土となる。表層は膜状、管状の斑紋があり下層は雲状の斑紋に富む。土地利用は水田であり、松川町、大玉村に分布する。生産力

はやや高い。

(2) 粗粒灰色低地土

表層、次層は灰褐色または灰色の粘質土、あるいは壤質土であるが、地表下30cm内外より礫層または砂礫層となる土壤である。

・象目田統：表層、次層は灰褐または灰色の粘質ないし壤質土であるが、地表下30cm内外から礫層または砂礫層となる。土地利用は水田であり、安達太良川、駒寄川などの河川沿に分布する。生産力はやや低い。

【グライ土】

(1) 細粒グライ土壤

グライ層のある粘質または強粘質土で、グライ層の出現位置や母材によって3土壌統に区分した。

・丹井田統：全層または作土下よりグライ層となる強グライ土壤である。土性は表層、次層は粘質～強粘質であるが、下層は壤質土となるところもある。土地利用は水田であり、阿武隈山系の樹枝状低地に分布する。生産力は低い。

・下道渡統：表層は灰～灰褐色の粘質土であるが、地表下50cm以内からグライ層となる。母材は花崗岩であり、阿武隈山系の基盤整備地などに分布する。土地利用は水田であり、生産力はやや低い。

・久保田統：表層は灰色の強粘質土であり、地表下50cm内外から強粘質のグライ層となる。土地利用は水田であり、安達町や二本松の原セ、本宮町などに分布する。生産力は中。

【黒泥土】

(1) 黒泥土壤

・油井統：表層および次層は灰色の強粘質土であり、地表下50cm以内に強粘質の黒泥層がある。土地利用は水田であり、安達町の油井、二本松市の永田、原セなどに分布する。生産力は中。

(福島県農業試験場研究員 佐藤紀男)

山地・丘陵地域の土壤

1. 岩屑性土壤

箕輪山・薬師岳・和尚山・石筵川周辺の急傾斜地に分布する崩壊性の土壤である。一般に表層から角礫・半角礫に富み、有効土層も深くて20cm以内で、ひどいところは一部岩石地になっているが、これは雨・雪による受蝕作用・河川による下刻作用によるものである。

なお、岩屑性土壤の一部には残積性受蝕土も含めてある。

この土壤の生産力はⅣ～Ⅴ等級で造林は全く不可能である。

2. 火山抛出处未熟土壤

安達太良山の西側沼ノ平を中心に分布する土壤である。

(1) 沼ノ平統 (Numanotaira)

爆裂火口の凹地形一帯に分布する火山灰よりなる未熟土壤である。表層より灰白色の火山灰におおわれ、浅いところでは10cm、深いところでは60cmにおよんでいる。下層は場所によって半角礫を含み基岩に続いている。従って、土壤というよりも火山灰そのものの層で植物はほとんど生育していない。この土壤の生産力はⅤ等級である。

3. 黒ボク土壤

安達太良山を取り囲むように比較的傾斜の緩やかな山麓や原野に分布する火山灰を母材とする黒色土壤である。

(1) 岳統 (Dake)

岳温泉を中心としてそれ以北に分布する黒色土壤である。A層は一般に浅く30cm以下のところが多く、土色は黒褐色で腐植に富む。土性は壤土～微砂質壤土、堅さは軟～やや堅で構造は弱団粒状～粒状である。B層は50cm以上と深く、土色は褐色～黄褐色で腐植は乏しい。土性は埴壤土、堅さはやや堅で構造は無い。水分状態はA層・B層とも潤である。

土色のみでは褐色森林土壤とも言えるが、A層は火山灰特有の土色をし、層区分も判然としているため黒ボク土壤とした。

(2) 寺沢統 (Terasawa)

安達太良山南部の山麓地や平坦地に分布する。A層は一般に40～60cmと深く、土色

は黒褐色で腐植に富み、A層上部は黒色となっているところもある。土性は微砂質壤土～壤土、堅さは軟で、構造は弱団粒状となっている。B層の深さはまちまちで下層に半角礫を混入しているが、場所によってはほとんどB層は無く基岩に続いている。土色は褐色で腐植は乏しい。土性は埴土～埴壤土、堅さは堅で構造は無く、水分状態はA層・B層とも潤となっている。

これらの黒ボク土壌は、一般に土層が深く、林木の生育も中庸であるため、生産力はⅡ等級である。

4. 乾性褐色森林土壌（赤褐色系・黄褐色系を含む）

山地の尾根や山腹凸部および風衝地等に分布する土壌である。

(1) 高松Ⅰ統（Takamatu—Ⅰ）

北は笹森山から南は高松山に至る広い範囲に分布する安山岩質岩石や凝灰岩を母材とする乾性土壌である。一般にA₀層（L～F層）を形成する。A層は15cm前後と浅く、土色はにぶい黄褐色～暗褐色で、腐植にやや富む。土性は壤土、堅さは軟で細粒状～粒状構造となっている。B層も20cm前後と浅く、土色は褐色で腐植は乏しい。土性は壤土堅さは堅で、構造は弱堅果状～無しである。水分状態はA層・B層とも乾で、B層下部には半角礫を混入する。森林土壌のBA・BB・BCに相当する。

(2) 安達Ⅰ統（Adachi—Ⅰ）

北は福島市松川から南は本宮町に至る花崗岩類を母材とする乾性土壌である。一般にA₀層は浅くL層より成る。A層は10～15cmと浅く、土色は暗褐色～褐色で腐植にやや富む。土性は壤土、堅さは軟で、細粒状～粒状構造が認められる。B層も20cm前後と浅く土色は褐色～にぶい黄褐で腐植は乏しい。土性は埴壤土、堅さは堅で、弱堅果状構造となっているA層・B層とも乾で、B層下部には半角礫を混入する。森林土壌のBA・BB・BCに相当する。

(3) 黒岩Ⅰ統（Kuroiwa—Ⅰ）

本図幅の北東部にわずかに分布し、花崗岩・碎屑物を母材とする残積性の乾性土壌である。一般にL～F層よりなる。A₀層を形成している。A層は10cm前後と浅く、土色は暗褐色で上部は腐植にやや富む。土性は埴壤土堅さはやや堅で、粒状構造が認められる。B層は20cmと浅く、土色は褐色で腐植は乏しい。土性は埴土堅さは堅で、構

造はあまり認められない。A層・B層とも水分状態は乾でその境界は判然としている。土壌色は7.5 YRであるが、母材は赤紫色(10R～5 Y R)となっているため赤褐色とした。従って、森林土壌の rBA・rBB・rBcに相当する。

(3) 白岩Ⅰ統(Shiraiwa-Ⅰ)

本図幅の南東部白沢村周辺に分布する花崗岩を母材とする残積性の土壌である。A₀層はそれほど発達しておらず、A層も5～10cmと薄い。土色は暗褐色で腐植を含む。土性は壤土、堅さは鬆～軟で、粒状構造が認められる。B層はにぶい黄褐から明黄褐で腐植に乏しい。土性は壤土～埴壤土で、B₁層に弱粒状構造が認められることもある。A層・B層とも水分状態は乾で、その境界は明である。褐色森林土壌の yBA・yBB・yBcに相当する。

この乾性褐色森林土壌は一般に表層が浅く、腐植も乏しいことから林木の生産力は劣りⅢ等級である。

5. 適潤性褐色森林土壌

山地や丘陵地の斜面上部から山脚部にかけて広く出現する匍行性の土壌である。本土壌は乾性土壌と湿性土壌の中間に属する土壌であるが、適潤性の土壌[B_D型]よりもやや乾性の偏乾亜型のもの[B_D(d)型]が極めて多く、広い面積を占める。

(1) 高松Ⅱ統(Takamatu-Ⅱ)

高松Ⅰ統と同じ母材よりなり、同じ地区に広く分布する土壌である。A₀層はF層が主体であるが、あまり発達していない。A層は20～40cmと場所によって差がある。土色は黒褐色～暗褐で腐植に富む。土性は壤土堅さは軟で、塊状または弱団粒状構造となっている。B層は50cm前後で、B₁層とB₂層に分れている場合が多い。B₁層は暗褐色～褐色の土色で腐植をやや含み、堅さはやや堅、構造は弱塊状となっている。B₂層は褐色～黄褐色の土壌で腐植を欠き、堅さは堅で構造は無い。水分状態はA層・B層とも潤で、層区分は漸～判となっている。褐色森林土壌のB_D(d)型、B_D型に相当する。

なお、この土壌の中には、母材は火山灰であるがA層から見て黒ボク土壌とするよりも褐色森林土壌とした方が良いと思われる土壌を含め分類した。また、この地域には部分的に湿性褐色森林土壌も認められるが、面的な広がり小さいので適潤性褐色

森林土壌に含め図示した。

(2) 安達Ⅱ統 (Adachi-Ⅱ)

安達Ⅰ統と同じ母材よりなり、同じ地域に広く分布する。A₀層はL・F層が主体である。A層は20cm前後で、土色は暗褐で腐植にやや富む。土性は壤土、堅さは軟で弱塊状構造となっている。B層は50cm前後で土色は暗褐色～褐色であるが、B₁層とB₂層に分かれている場合が多い。堅さはやや堅で構造は無い。水分状態はA層はやや乾B層は潤、層区分は漸～判となっている。褐色森林土壌のB_D(d)型、B_D型に相当するが、B_D(d)型がほとんどである。

(3) 黒岩Ⅱ統 (Kuroiwa-Ⅱ)

黒岩Ⅰ統と同じ母材よりなり、同じ地域に分布する土壌である。A₀層はL層よりなり、あまり発達していない。A層は15cm前後と浅く、土色は極暗褐色～暗褐色で腐植はやや富む。土性は埴壤土～埴土で粘質が強く、堅さは堅で、上部に粒状～団粒状構造が認められる。B層は、50～80cmで褐色～明褐色となるが、腐植は乏しい。土性は埴土、堅さは堅で構造は無い。水分状態は、A層・B層ともやや乾～潤で、その層界は漸変である。褐色森林土壌のrB_D(d)型、rB_D型に相当する。

(4) 白岩Ⅱ統 (Shiraiwa-Ⅱ)

白岩Ⅰ統と同じ母材よりなり、同じ地域に分布する土壌である。A₀層はL・F層よりなるも薄い。A層は30cm前後とそれほど厚くない。土色は暗褐色～にぶい黄褐色で腐植を含むが、色が淡いためA-B層とすることもできる。土性は壤土、堅さは軟で塊状～弱団粒状構造がみられる。B層は60cm前後の厚さで土色は黄褐～明黄褐になっている。土性は壤土～埴壤土、堅さはやや堅で構造は無い。水分状態はA層はやや乾・B層は潤となり、層界は漸～判になっている。褐色森林土壌のyB_D(d)、yB型に相当する。

この適潤性褐色森林土壌は有効土層が割合深く、林木の生育も比較的良好で生産力はⅡ等級である。しかし、岩屑性土壌や暗色系褐色森林土壌の隣接地では生産力が劣り級位も下る。また、局部的に出現する湿性褐色森林土壌は面積が小さく図示できなかったが、この土壌の生産力はⅠ等級である。

6. 暗色系褐色森林土壌

安達太良山周辺の標高1100～1400mにある比較的緩かな斜面に分布する土壤である。この土壤は、褐色森林土壤と湿性ポドゾル化土壤の中間帯にほぼ垂直成帯的に出現する土壤で、両者の中間型に相当する。

(1) 薬師統 (Yakushi)

A₀層はF～H層よりなり層も発達している。A層は20cm前後あり、土色は黒褐色で腐植に富む。土性は壤土堅さは鬆で弱団粒状構造となっている。B₁層は暗褐色でやや赤味が強く腐植にやや富む。堅さはやや堅、構造は乏しい。B層下部には多少角礫が認められる。水分状態は潤である。この土壤は高海拔のため落葉の分解が遅く、林木の生育も劣るため土壤の生産力はⅢ等級である。

7. 乾性ポドゾル化土壤

標高1200m以上の山頂・尾根筋および凸形斜面等の乾燥の影響を受けやすい地形に生成されている土壤でP_DⅡ・P_DⅢが主である。従って、暗色系褐色森林土壤や湿性ポドゾル化土壤の分布域に線状に出現する。

(1) 箕輪統 (Minowa)

A₀層はF層、H層とも良く発達している。A層はA₁層、A₂層に分かれ、A₁層は黒褐色でわずかに溶脱症状が認められる程度である。A₂層は、暗赤褐の土色を呈し、下部に集積層が認められる。堅さはA₁層は軟A₂層はやや堅で、土性は壤土～砂質壤土となっている。50cm附近には基岩あるいは硬盤層が認められる。

この土壤は寒冷偏湿気候下にあるためA₀層の分解が遅く、またA層からの溶脱があるため林木の生産力は低くⅣ等級である。この土壤の造林は不可能であり、また伐採方法を誤ると荒廃を招くので注意を要する。

8. 湿性ポドゾル化土壤

標高1400m以上の鈍頂な尾根や緩斜面および火山泥流台地に生成されている斑鉄等の影響の強い土壤で、Pw(i)Ⅱ, Pw(i)Ⅲ, Pw(h)Ⅱ, Pw(h)Ⅲ等が主である。

(1) 安達太良統 (Adatara)

○Pw(i)型

僧悟台や勢至平等の火山泥流台地の一部に生成されている土壤である。A₀層はF・H層等も良く発達している。A層は、A₁層とA₂層に分かれ、A₁層は黒色で腐植

に富む。土性は埴壤土で堅さは軟である。A₂層は暗褐色で腐植にやや富み、土性は埴土で堅さはやや堅である。B層は暗灰黄の溶脱層で堅さは堅く埴土となっている。溶脱はA₂層より一部認められるが、B₁層では完全に溶脱し、その下部に厚い集積層が形成されている。

○Pw(h)型

箕輪山や船明神山の山頂部に生成されている腐植型のポドゾル化土壌である。A層はA₁層とA₂層に分かれ、A₁層は黒褐色で腐植に富み、土性は埴壤土堅さは軟となっている。A₂層は暗褐色で腐植にやや富み、土性は埴壤土堅さはやや堅となっている。B層は褐色で腐植に乏しく土性は埴土で、堅さは堅となっている。A₂層に溶脱層が認められるがあまり顕著では無い。

これらの湿性ポドゾル化土壌は、乾性ポドゾル化土壌とほとんど同じような生産力でⅣ等級である。

(福島県林業試験場育林部長 平川 昇)

(福島県林業試験場主任研究員 荒井 賛)

Ⅳ 傾 斜 区 分 図

図葉域内の傾斜分布を概観すると、傾斜 30° 以上の急傾斜地は標高の大きな安達太良火山群一帯は当然としても、南西部の高玉山地にかなり広くみられる。非火山性山地は標高 $800\sim 600$ m、起伏量 400 m 以下でも、開析が一定程度進んだ段階で急傾斜地が高い密度で現われることを示している。それ以外の山地・丘陵地において 30° 以上の部分が出現するのは、阿武隈川本流や一部支流が局地的に激しい側方侵蝕を行なったところにほぼ限られる。

傾斜 $15^\circ\sim 30^\circ$ の、いわば中程度の傾斜をもつ斜面が図葉域内にはもっとも広く分布する。山地・火山地・丘陵地を問わず（低地は別として）、山腹・丘腹斜面の平均的な勾配はこのあたりにあることを示すようである。

傾斜 $3^\circ\sim 15^\circ$ の、緩斜面ないし緩傾斜地は、ひと続きの広大な斜面としては安達太良火山麓に、こまかな谷ごとにおびただしく発達する小規模な斜面としては東半部の丘陵地にそれぞれ典型的に分布して、本図葉域内の傾斜分布の大きな特色のひとつをなしている。

傾斜 3° 未満の平坦地は、地形分類図における Gt I 以下の段丘面および谷底平野などにほぼ一致して分布する。とくに広いところは言うまでもなく大玉扇状地 IVc の下流部と杉田川・原瀬川・安達太良川の各低地（Vb～Vd）、さらに北東部の湯川・水原川沿いの低地（Vf、Vhなど）等である。阿武隈山地西縁丘陵においては、ひと続きの広大な平坦面は全く存在しないが、樹枝状に発達する多数の開析谷の、主として幹にあたる主谷の谷底が大体 3° 以下の平坦地となっており、その面積を合計すれば決して狭小というほどではないものとなる。

以下、各地形地域ごとに特色を述べる。

A 安達太良火山地

傾斜区分図が、表現上の制約のため、実際の斜面の水平面への投影図にすぎないことから、傾斜の大きい斜面ほど、その投影断面の面積は狭小になる確率が高くなる。たとえば火口壁の急崖や、鉄山南東壁、湯川溪谷上流の峡谷部など、場所によっては比高 200 m をこえる急斜面も、 40° 以上の急傾斜地として本区分図に表わせれば、それら

のかなり密集した状態から険しい山岳景観を読みとることはできるとしても、その平面形は丘陵地に入り込む開析谷の支谷群の緩傾斜地のそれと大差はない。傾斜区分図をオーバーレイとして、等高線のはっきりわかる地形図に重ねるなどの方法で利用できるようになっているのもこのためである。

安達太良火山地における傾斜区分のもうひとつの特色は、裾野の部分に傾斜 $3^{\circ}\sim 8^{\circ}$ の緩斜面が広くひろがるのは火山地の一般的形態であるが、とくに中腹部で、溶岩流台地の末端にしばしば 30° をこえる急傾斜部が火山体の山頂から山麓への滑らかな断面形を破るように分布していることである。僧悟台、勢至平、五葉松平、赤木平のそれぞれ末端部がこれである。

B 高玉山地

全体として中起伏かつ小規模な山地ながら、壮年山地の特徴として急傾斜部がかなり高い密度をもって分布している。火山地と違って山麓部まで 20° 以上の値を示し、一部に山腹斜面下部ほど急勾配となる凸形斜面も認められる（Ia, Ibなど）。

C 安達太良東麓山地

上記山地よりも侵蝕段階が一層進んだ山地であるため、傾斜も比較的緩やかなところが広い範囲を占める。そのなかでも、笹森山地 Ieの北東斜面（水原川右岸）は深い谷に刻まれて急斜面となっているところが多い。

D 本宮低地

岳付近の地溝性凹地から大玉扇状地上流部にかけては、傾斜 $3^{\circ}\sim 8^{\circ}$ の緩斜面が本図葉中で最も広く発達する。この凹地帯は、北から湯川・原瀬川・杉田川の3本の河谷によって刻まれて台地となっているが、 $620\sim 450\text{ m}$ という標高のわりに開析が進んでいないのは、東側の苗松山地壘状山地が開析谷の東からの侵入を防ぐ役割を果たしているからである。

E 二本松丘陵地

丘陵斜面はほぼ $15^{\circ}\sim 20^{\circ}$ 、麓斜面の部分が $8^{\circ}\sim 15^{\circ}$ または $3^{\circ}\sim 8^{\circ}$ 、段丘面が 3° 未満と、比較的よく対応している。丘陵地形のひとつの典型例とみなしてよいであろう。

F 松川丘陵地

上記丘陵地と基本的には共通する点が多いが、とくに水原川・駒寄川水系の河床勾配がやや大きいことを反映して、Gt II⁺、Gt Iの傾斜が8°～15°と大きくなっているのが目立つ。

G 阿武隈山地西縁丘陵地

二本松丘陵地と同様、典型的な丘陵地であり、15°～20°の丘陵斜面と、3°～15°の麓斜面が圧倒的な面積を占める。

なお、標高区分の等高線からは、東半部丘陵地における丘頂の定高性がはっきりわかる。

(福島大学教育学部教授 中村嘉男)

V 水系・谷密度図

図葉内の水系は、北西隅の約20km²が阿賀野川水系（酸川最上流域）に含まれるほかすべて阿武隈川水系に属する。また、図葉域のなかで水系の大まかな分布傾向を支配するものとしては標高1700 m前後のいくつかの山峰をもつ安達太良火山群があり、そこから発する数多の河川が東流あるいは南東流して阿武隈川に注ぐというパターンが最も著しいものとなっている。そのほかには、①阿武隈川左岸支流のうち、安達太良火山地以外に流域をひろげるもの（羽石川・水原川・駒寄川・七瀬川・矢沢川等）、②阿武隈川右岸の各支流群が、それぞれ特色ある水系模様を展開している。以下、各地形地域ごとにそれらの特色を述べ、最後に谷密度について説明する。

(1) 水系図

A 安達太良火山地

火山体を開析する放射谷は、この火山地の場合、南～南東斜面に多数形成されているが、西から北～北東斜面にかけては、爆裂火口壁や溶岩流台地の存在、さらに主稜線が南北にほぼ直線状にのびることなどのため、求心状パターン（箕輪山西斜面、鬼面山北東斜面など）や平行流路（安達太良山東斜面の湯川・烏川・原瀬川・杉田川の各上流部）がみられる。

B 高玉山地

五百川左岸支流の石筵・七瀬・矢沢3河川のうち、七瀬川・矢沢川は樹枝状に小支流を発達させるが、石筵川の場合は、Gt II⁺のひろがる石筵川低地 Vaをはきんで石筵川左岸と、支流水上川の右岸にそれぞれ樹枝状支谷群を非対称的に作り出している。また、七瀬川と矢沢川の最上流域は、安達太良川上流右岸の支谷によって争奪されかかっている。

C 安達太良東麓山地

北部の笹森山地 Ieでは、笹森山（650 m）を中心にして放射状の水系が発達し、南部の苗松山地 Ifでは、南端にある苗松山（498 m）を中心にして半径約1 kmの半円形流路をもって流れの向きを東にかえる杉田川の特異な形状が目される。また、前述のように、苗松山地の存在が、岳地溝性凹地（台地）への開析谷の侵入を妨げている

ことが、水系模様からもはっきり示される。原瀬川・杉田川の水系は、本流の2本を除き、支流群はことごとくこの山地の東側斜面を開析するに止まっているのである。

D 本宮低地

安達太良川・杉田川・原瀬川は、それぞれの中流部において支谷群の大部分を併せしてしまい、下流部の低地一帯においては、幹川のみが4～5kmにわたって流下することとなる。もちろん、大玉扇状地にあっては伏流となっているものも少なくないと思われる。

E 二本松丘陵地

二本松丘陵地内に流域をもつ羽石川・六角川（東北本線二本松駅北側を東流する）・鯉川（二本松北部市街地を東流する）はいずれも谷密度15～20程度で樹枝状支谷群を伴うが、安達太良山東斜面に発源する湯川（下流で油井川）は流路延長（約18km）の割には流域面積が狭く、支流も右岸に若干を数えるにすぎない。また、その中流部鉄扇町付近では、谷底高度がここより10mほど低い北隣りの弘川の流路によって、湯川上流域が奪われる寸前の地形が認められる。実際には両河川とも人工管理下にあり、piracyの起る心配はない。

F 松川丘陵地

駒寄川（上流で弘川）および水原川の各支流群が丘陵を細かく開析しているが、平坦地・緩斜面の広く発達する水原川低地 Vhには幹川流路が支流をほとんど伴わずにまっすぐに東流している。

G 阿武隈山地西縁丘陵地

安達丘陵 III d、富ヶ峰丘陵 III fには流域面積の狭い小規模河川しかみられないが、白沢丘陵 III eには阿武隈川右岸の比較的規模の大きな支流群（浅川、平石川、仲川、白沢川など）が小支谷を樹枝状に発達させている。平石川および仲川の上流部は、一部で阿武隈川右岸から直接刻み込んでいる小支谷群の谷頭と谷中分水界で接しているところがある（平石三丁目の西、白旗付近など）。丘陵地に一般にみられる支谷同士の流域争奪の例である。

(2) 谷密度図

谷密度30以上の区画が集中しているのは北部の笹森山地と南東部の高玉山地である。

ほかには、丘陵地のところどころに小支谷の発達による高密度地が点在するものの、全体としては20～25の範囲に収まるところがほとんどである。安達太良火山地は地形形成期の新しさを反映して谷密度も15～20程度と低い。

谷密度10未満が広く現われるのは大玉扇状地・安達太良川低地のほか、水原川低地・湯川低地のそれぞれ下流部に限られる。谷密度と地形地域との対応は、山地30～40、火山地15～20、丘陵地20～25、台地・段丘・低地15未満となっている。

(福島大学教育学部教授 中村嘉男)

VI 開 発 規 制 図

国立公園は、磐梯朝日国立公園で、図葉西部の沼ノ平周辺が特別保護地区、第1種特別地域が箕輪山から船明神山にかけて、第2種特別地域が横山温泉周辺・鬼面山から箕輪山にかけて・勢至平から前ヶ岳にかけて・屏風岩・障子ヶ岩及び岳温泉付近の地域であり、その他が第3種特別地域となっている。

県立公園は、図葉東部のほぼ中央に霞ヶ城県立公園があり、普通地域・第2種特別地域及び第3種特別地域とがある。

また、霞ヶ城県立公園の東部に安達ヶ原県立公園があり、公園内は普通地域となっている。

保安林は、水源かん養保安林が図葉西北部から西南部にかけて、高松山付近に分布している。土砂流出防備保安林が石筵川付近・三ツ森貯水池の北部・苗松山付近・原瀬川上流・岳温泉付近及び二本松市二又の北部にあり、水害防備保安林が湯川と東北自動車道の交叉点の東部に分布している。

砂防指定地は、湯川・鳥川・原瀬川・杉田川・安達太良川・七瀬川・石筵川沿岸及び三ツ森貯水池付近・安達太良山ろくの小関付近の地域である。

鳥獣保護区としては、国鉄二本松駅周辺の二本松鳥獣保護区、国鉄本宮駅周辺の本宮鳥獣保護区、県民の森周辺の前ヶ岳鳥獣保護区、雑子内周辺の熱海町鳥獣保護区がある。

国有林は、図葉北部から西南部にかけて及び夢想山周辺に位置している。

特殊専用地区は、豊石山付近の自衛隊演習地がある。

史跡は、国指定の「旧二本松藩戒石銘碑」、県指定の「原瀬上原遺跡」がある。

名勝は、県指定の「岩角山」があり、天然記念物としては、国指定の「馬場さくら」県指定の「安達太良山ヤエハクサンシヤクナゲ自生地」、「石筵のシダレグリ自生地」がある。

重要文化財としては、県指定の「木像阿弥陀如来坐像（西光寺）」、「木造阿弥陀如来坐像（善性寺）」、「木造毘沙門天及び吉祥天・善膩師童子立像（岩角寺）」がある。

(福島県農地林務部農地計画課主査 猪 狩 孝 一)

Ⅵ 土地利用現況図

本図幅地域の主なる土地利用の現況は農地（田・畑・樹園地）、林地、草地、都市・地落・未立木地・岩石地に区分される。

安達太良山麓地域の丘陵地域は、標高、地形、土壌等の自然条件にも開発可能地が多くみられるので、今後、この地域の農林、畜産業の振興のため計画的に土地利用が高度化されるものと考えられる。

1. 農業

本地域の水田は、図葉中央南部、阿武隈川、水原川、境川、原瀬川、弘川沿岸、石筵付近等に分布し、耕地面積の約61%を占めている。

畑は、岳温泉北部の大関と村落の周辺に多い。これらの畑では、ばれいしょ・大豆・たばこ・はくさい・大根等が作付されている。

果樹園は図葉北部の壘石山麓に多く分布しており、りんご・もも・なし・ぶどうを作付している。

なお、桑園の面積は少ない。

2. 林地

本図葉内の約44%が林地であり、そのうち約46%が民有林で、その他が国有林及び公有林である。

3. 草地

図葉ほぼ中央部の岳温泉付近及び図葉南西部の萩岡に多く分布している。

4. 都市・村落

国道4号線沿い、安達太良川、原瀬川、水原川、弘川沿岸、岳温泉付近及び郡山市的場付近に村落が集中している。

(福島県農地林務部農地計画課主査 猪狩孝一)

1984年3月 印刷発行

土地分類基本調査

二 本 松

編集発行 福島県農地林務部農地計画課
福島市杉妻町2番16号
電話 (0245) 21-1111(代表)
内線 3872
印刷 福島印刷センター
福島市北矢野目字渋田28-9